

NETWORK

鄙のよさを生かした地域づくりで、田園居住を楽しむために
～糸島地域で、その自覚に基づいた地域づくりが始まった～ … 2
“田舎暮らし”の案内人 築島義彦さん
～すでに110家族のお世話をした～ … 4
工芸家など、いろんな人が移り住み、

面白くなりつつある町・嘉穂町

～移住者受け入れの仕組みと取り組みについて～ … 6
都市・農村交流の手始めは棚田から
～福岡県浮羽町の棚田オーナー制度～ … 9
地域の認知度が高い作業所
～福岡県福岡市小規模作業所サンテラス … 11
『いのちの営みに沿った農への取り組み
～自然な食べ物、農について考える』 … 13
生産地と消費地の密接度が価格につながるようだ … 14

見・聞・食

近くて、近くなってきた国 近くて、まだまだ遠い国
～韓国・中国1日ホームステイ報告～ … 15
『建物を壊さずに、まちの賑わい拠点をリニューアル
～太宰府いきいき情報センター』 … 17
跡継ぎ問題としての長男・長女社会は始まったばかり … 19

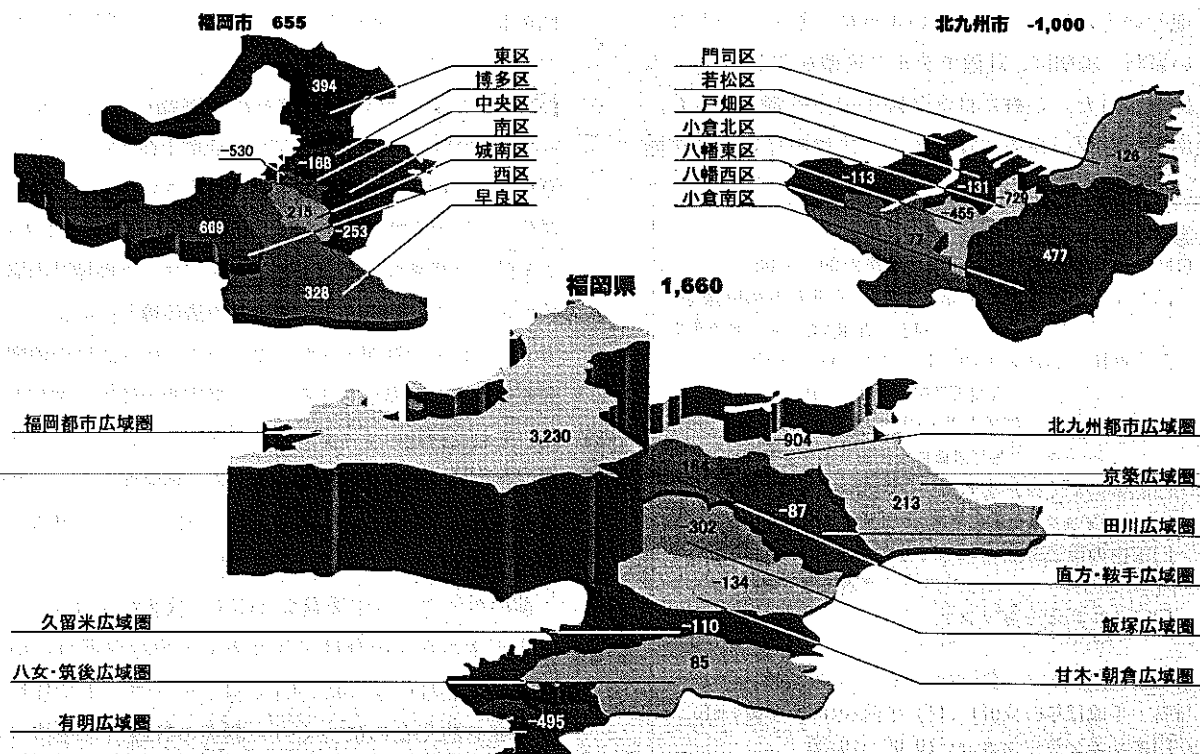
近況

イギリスの子どもたちと竹のアーチづくり … 20
表紙解説 都心周辺部に高齢者が移動している … 21
所員近況 … 22

本・BOOK

ラーメンの文化経済学 … 24

高齢者は都心部周辺に移動している



福岡県の65歳以上人口の移動状況について、10生活圏と政令市の各区に分けて転入・転出超過数をみたものである(資料:「福岡県の人口と世帯年報」平成8～11年)。県内では福岡市周辺の福岡都市広域圏で大きく転入超過し、その他の生活圏は若干の増加または減少である。また一方で、都心部の転出超過が目立つ。(本文21頁)

鄙のよさを生かした地域づくりで、田園居住を楽しむために

～糸島地域で、その自覚に基づいた地域づくりが始まった～

糸乗 貞喜・山辺 眞一・伊藤 聡

【志摩町まちづくり応援団と町役場が協力して、8月19・20日にシンポジウムとワークショップをおこなった】

応援団というのは、まちづくりに関心がある「志摩町大好き人間」の集まりで、ワークショップ支援チームのこと。私もそれに加わったので、その報告をしたいと思う。呼びかけたのは樋口明彦九州大学助教授で、福岡都市圏在住のメンバーが十数人集まった。職業はまちまちで、特別養護老人ホームの支配人、志摩町役場の職員、九州大学の海洋工学、社会心理学の先生、生態計画、建築計画、都市計画の仕事人、樋口研究室の大学院生などからなっている。6月頃から月2～3回ペースで準備会を行い、志摩町の魅力、現在志摩町が抱えている問題、近い将来に起こると考えられる問題、志摩町の魅力を活かす（殺さない）開発の方法などについて討論した。また準備としては、ワークショップで地元の方が取っつきやすいように、短くてわかりやすい資料、説明図、計画モデルの模型などが10チーム分用意された。これには大学院生の大奮闘があった。

応援団の思いを先に述べると、志摩町は福岡都市圏

の中で自然の豊かさが残された唯一の町であり、この自然が無惨に破壊されて、ヒナ壇型の宅地開発が進んでいくのは忍びないということである。一方、露地物のミカン畑は、ハウス栽培への移行が大勢となる中で（旬を無視した農業でないと食えない）、経済的に全く成り立たなくなっており、放置されることによって葛のつるに覆われた荒れ地になってしまっている。このような荒れていく土地を誘導して、豊かな「農ある暮らし」型の宅地（一反＝300坪）づくりができないか。また、農業集落の高齢化・少子化が進んでいるが、都市住民を受け入れてともに協力して地域づくりを進めることが考えられないか、などである。これらのことを新旧住民を含めたワークショップで考えてみたいということが応援団の意図であった。

以下、志摩町の魅力、現在抱えている問題点、応援団の提案、シンポジウムやワークショップ様子などについて述べてみたい。

【ワークショップは侃々諤々の大議論になった】

8月19日のシンポジウムでは、志摩中在学中にまちづくりについての作文を出し、その時表彰された子供（今は大学生）たちの座談会「どんな志摩になってほしい？」とか、大学院生の提案などのほかに、ニューヨーク地域計画協会代表ボブ・ヤーロさんの「アメリカ流環境共生のまちづくり」についての話があった。ヤーロさんは「志摩の田園風景を無秩序な開発から守るには、都市側の住民の理解と支持、それに行政のリーダーシップがいる」といった。気になったのは「十分な保全ができると、地価が上がって高齢者が住めなくなることもある」という話で、アメリカと日本の土地保有コストの違いを感じた。

前のケーブコッド委員会（CCC）代表のアルマンド・カルボネルさんの話はアメリカでの飛行機遅れに引っかけた翌日になった。CCCはケーブコッドで住民が乱開発を防ぐためにつくった開発の許認可権を持った機関で、カルボネルさんの話は「住民の合意形成が大切だ」ということだった。説得のために100回も通ったところもあるといていた。

志摩町まちづくりシンポジウム

日時：平成12年8月19日（土）午後2:00～5:00

□どんな志摩になって欲しい？：子供たちの座談会

司会：九州大学 南 博文先生

□志摩町らしさを大切にしたいまちづくりの提案

九州大学環境デザイン研究室のみなさん

□アメリカ流、環境共生のまちづくり

ニューヨーク地域計画協会代表 ボブ・ヤーロさん

□志摩によく似たまちケーブコッドでのとりくみ

前ケーブコッド委員会代表 アルマンド・カルボネルさん

□国内の住民参加まちづくりのとりくみについて

九州大学 出口 敦先生

□パネルディスカッション

まちづくり住民ワークショップ

日時：平成12年8月20日（日）午前10:00～午後4:00

□オリエンテーション 10:00～10:30

□小グループによるワークショップ 10:30～12:30

□昼食 12:30～1:30

□全体ワークショップ 1:30～4:00

ワークショップは、約100人ぐらいが9チームに分かれて行った。どの組も大激論だったようだ。こういうときに問題となる新旧住民の話はどの組でも出た。

(いとのり さだよし)

それでは各班でどのような意見が出されたのか9チームの中から2チームを取り上げ、出された意見を紹介する。

【「地家もん」と「よそもん」】

我々の班はよそから転入してきた人がほとんどであった。といっても、嫁いできた人が数人含まれている。志摩では元々住んでいる人を「地家もん（じげもん）」、入ってきた人を「よそもん」と呼ぶ。昔からある家に嫁いできた人は「地家もん」になるそうだ。当班では九大の学生が班長を務め、彼らはこれまで志摩の問題点として景観や開発の形態を中心に町を見てきた。しかし、住んでいる人の最大の関心事あるいは心配ごとはコミュニティに関することであると初めて気づき、『目から鱗』のようだった。

転入者である「よそもん」の言い分としては「志摩の明るい雰囲気が入って家を建てたが、住んでみると悪い方ばかりが目につく」「20年も住んでいるのにまだ、余所もん扱いしかしてくれない」「もう仕事も引退したのに仲間に入れてもらえない」云々。

「地家もん」の意見としては「転入者は勝手に入ってきた上、地域に協力しない」「ずっと住んでいた人の苦勞が分かっていない」「開発抑制とはいえ集落の中の空き家に住まれるのはいやだ、どこかで団地開発してもらう方がまだまし」「人の面倒を見る暇はない、農家は忙しい」など。これでは新旧住民それぞれで固まるしかなくなる。

田んぼが一枚住宅地になると、周辺の農地では農家も気を使い、なるべく人の出歩かない時間を見計らって農作業をまいたりしている。その配慮に新住民は気付いていない。そんなところもすれ違いの原因になっている。

しかしきっかけはある。新住民のある人は、庭で野菜を作っていたところへ近所の農家が声をかけてきて、それ以来野菜作りを教わっている。あるお婆さんは、地元のお婆さんたちの井戸端会議に入ることが出来た。その人たちは個人レベルの糸口から輪を広げている。

お互いに毛嫌っているのは、結局顔が見えないからなのだろう。集団同士はどうしてもいがみ合いがちだ。「酒でも飲みながら話をする場がほしい」「夜なべ

談義をしたい」という声は強かった。(いとう さとし)

【このままいけば志摩らしさがなくなる。だから目指すものを一緒に何か考えたい】

「農地が虫食い状態で、もう売ってしまうしかないと思っている人がたくさんいる」「自己完結型の暮らしをしたくて住み始めたが、なかなかできん」「便利は良いとこだけど、昔のような風景が見られなくなった。農地が荒れている」「みかん山開発しても一人が儲かるだけで、周りの人は迷惑する。みんなが良かったと思えんといかん」「農業する人が減った。何とかしないと自然も壊れる」「志摩でずっと農業したい。でも後継ぎがおらん。せっかく作り上げたノウハウが途絶えるのは悲しい」「全国から注文を取って出荷している。後継者も一応確保している。もっと農業をしに入ってきて欲しい」

ここのチームのメンバーから出た志摩への思いである。「今の環境をなんとか守っていける方法はないか」ということが共通の思いだが、それには大学・学生さんをお客にして稼ぐことができれば、集落の若い人たちも後継ぎもしてくれるかも」とか「今の法律で糸島らしさを保てないならば、法制度の方で新しいことを進める、というくらいの気持ちは必要だ」など、置かれている立場、直面している問題に即していろいろな提案が出された。

志摩をどうするかの方針は、それぞれ違うように思われたが、「一体発展の行く着く先は何なのか、めざすものは何かを、これから考えていくことが大事だ」という点には、全員が納得の表情だった。

最後に、方向はばらばらだったが、座長（九大篠田先生）のアイデアによる模型のプレゼンテーションで当班は最優秀作品を獲得した。（やまべ しんいち）



小グループによるワークショップの様子

以上が当日の雰囲気であるが、激しいものとして、「人口は減ってもいい。勝手な人間は来るな」「来てもいいけど今の集落と関わりのないところで住んでくれ」「集落の共同作業をさぼるものは困る」というような意見、一方で「区への入会費や会費が高すぎる」という意見もみられた。その中で「やっと思っていることが言えた」という言葉もあった。

「全体として、志摩の環境を守りたいという思いがこもっており、今後も必ずこういう集まりを続けてほしい、という言葉が飛び交いながら終わった。その後ぼつぽつと、相談し合う動きも出てきている。

今回のワークショップは、大学移転がきっかけではあるが、いずれは自分たちのまちをどうするかを考えなければならない「コト」の始まりであり、地元の人たちだけでなく、大学教員も、学生も、企業の人も、みんなが一緒に考えていく場が大切だという意識が芽生えたという点で、大成功であった。

ひともうけ通信 2

「田舎暮らし」の案内人 築島義彦さん

(大分県大田村)

～すでに110家族のお世話をした～

糸乗 貞喜

●田舎暮らしのきっかけは息子さんの誕生—最近の活躍ぶりを話し出すと、途端にボルテージが上がった

この大田村に移住(1988年3月)してから小学校に入った長男の巧君が、太田中学野球部のエースとして県大会でベスト4に進んだ話になると、声も少し大きくなった。この26年ぶりの快挙に過疎の村は大いにわいたということである。

築島さんが大阪から田舎への移住を決意したのは、46歳の時に長女以来24年目に長男が生まれたからである。孟母三遷みたいだが、それ以来五年間田舎探しをした。とにかく「こんな環境の悪いところで子供を育てたくなかった。金だけの世界、ストリップの看板があるようなところではなく、子供の頃に経験したトンボのいるところ、メダカのいるところ、田や畑の風景のところで育てたかった」。それ以来、五年休みになると田舎探しに出かけたが、いつも今暮らしている岸和田の田舎方面に当たる、和歌山方面になってしまった。



築島一家は地方誌の表紙を飾った。

「帰りはいつも知らん間に商売の寿司屋のネタ仕入れのことを考えてしまっているんですわ」「このままやと、結局金と欲に縛られた人生になってしまう。元気に生きて元気のままで死ぬ、ということは出来のとは違うかと思いました」という訳で、ついに昭和62年5月に寿司屋もやめてしまう。

生まれは、まだ田舎であった岸和田で、11人兄弟の末っ子であった(昭和11年)。41歳の時生保会社を辞めて寿司屋を始めた。五年後に長男が生まれて田舎暮らしを決意するのである。

寿司屋をしていた築島さんが、日頃から「宮崎が大分で土地を売るところがあったら知らせて欲しい」と頼んでいたお客さん(バイクで日本中を回っていた人)が「売り地」の看板を見つけたのが大田村だった。「別に大分でなくてもよかったんです」が、12月に来てみてここに決めた。土地は7,000坪(23,000㎡)で、うち屋敷と畑が1,000坪ある。「少年時代からあこがれていたカキの木が、家のそばにあったので」決めた。そして家の手直しなどをして、三月に移転し、四月には長男の巧君が小学校に入学した。

遊び感覚を交えた暮らしを めいっばい楽しんでいます



たこ梅経営
梅本昇さん・妙子さん

府港にも近くて里帰りもしやすく、生活上の不便は全然ありません。

山で山菜を採ったり、村の人たちと隣の海へ貝掘りに行ったりと、念願のゆとり生活を満喫しています。また、もったいなくて伐採材でログハウスを造り、夫婦で一緒にできるタコ焼屋をはじめました。都会ではログハウスを自分で建てるなんて考えられないこと。完成した時の喜びはひとしおでした。

遊び感覚と共に暮らせるこの村で、次に何をしようか考え中です。園が裏をつくるのもいいですね。関西から遊びにくる家族や友達の感嘆の声がまた聞けそうです。

以前から「静かな田舎で暮らしたい」と考えていたところ、雑誌で国東での田舎暮らしを紹介する「プチトマト通信」(築島義彦代表・大阪府より大田村へ移住)の存在を知り、4年前に大阪市中央区から移住しました。大田村は道路も広く、国東半島の真ん中なのでどこへ行くにも便利。空港や別

村勢要覧には築島さんを通じて移住された方が紹介されていた。

●築島さんの世話で、全国から110家族の人たちが、大分県北部の国東方面に移住した

築島さんはもともと移住の斡旋をするつもりはなかった。移り住んできて一家がそろった頃に、大分合同新聞が取材にきた。また、田舎暮らし専門の月刊誌に暮らしぶりを掲載したので、東京や大阪から手紙が殺到したりした。その人たちや友人あての手紙に空き家の話を書いたりしていた。

その後胆嚢を病んで入院したりするが、退院後畑仕事もままならない頃、大田村長と会ったのがきっかけになって、110家族もの移住の世話をすることになった。

村長と話しているとき、築島さんが「田舎暮らしをしたい人は沢山いる」といったら、「何人ぐらいいるのか、もう一人大田村に連れてきてくれ」といわれた。「田舎暮らしをしたい人は、ひとりなんてものじゃなく、少なくとも一万とか十万人とかはいる」といってびっくりされた。いろいろ話し合っ、村長は「空き家などの物件を捜す」、築島さんは「人間を連れてくる」ということで、第一回「田舎見学空家ツアー」が始まった。

東京や大阪などから28家族が参加した。その中に朝日新聞の東京から来た人がいたようで、全国版にのっ

て評判になってしまった。第二回の「田舎見学空家ツアー」は69家族が参加してバス2台になった。このような経過を経て、今では「プチトマト通信」(たとえ小さな情報でも、たくさん実りますように、という意味)を会員に送っている。その数は480通で年10回(有料)。現在、築島さんは、娘さんが宅建取引の資格を取っているの、正式に宅建業の免許を持った業者として「プチトマト通信」を送っている。

●田舎暮らしのできる人、ダメな人

不動産を買うという態度で来ている人は、まずダメである。一度、軽四で案内していたら、「不動産屋というのは、もっと上等なクルマで案内するものではないのか」等といろいろな不服を並べられたので、「もう降りてくれ」といったこともある。奥さんがネックレス、マニキュア、イヤリングをしていたりすると、大体断る方向に持っていく。「その手では草取りや掃除にいきませんや」という。しかし田舎暮らしを決めるのは女の方で、男はいくら仕切っても、女の決断力にはかなわない。女は嫁に行くということを通して、単身で敵陣に乗り込むという訓練をへてきている、という話であった。

見込みのある人は、不動産取引ではなく「分けてもらう」という感覚のわかる人である。そしてつきあいや地域のしきたりを大切に人である。田舎には区(集落)の道路や水路の補修や共有林の下草刈りなどの出役があり、隣保(隣組)のつきあいもある。築島さんは現地案内をするときに、このようなことを十分話した上で、越してきた人には隣保班長に通してあげたり、区長のところへも連れていったりする。

トラブルもある。田舎は、暮らし全体は大きくても、現金の動きは慎重な場合が多い。ある時、紹介した人から相談を受けた。「区から40万円の寄付を言ってきたが払わにゃいかんのか」ということであった。よく様子を聞いてみると、隣保班長の所へ行ったとき、ポシェットの札束を無造作に見せていたのである。土地柄を十分わきまえない態度から起こった問題である。

●田舎暮らしするには、どうしたら……

110家族の移住者は、みなさんが農業をしている。しかし実際に農業で生活をするのは難しい。本格的にやっている人は3~4人しかいない。農業で生計を立てるか田舎で暮らしたいのか、いずれにせよ本気なら、まず40代か50代はじめに土地を買った方がいい。あとで買い換えてもいい。田を借りて減反対策に協力とい

うこともある。しかし田を買うと水利権が絡むので難しいから、畑にしといた方がよいように思う。

これまで築島さんを通して移住をした110家族の内訳は、千葉・神奈川・東京などが40%、大阪・神戸・奈良などが30~40%、あと山口・広島・九州・北海道などとなっている。これだけの人がやっているんだから、田舎が好きでやる気があれば、やれると言うことのようにであった。

大田村役場で聞いてみた話では、「築島さんがツアーをやったときに5~6軒入ったが、その頃は物件が揃っていた。以後1~2軒転入はある。全部で7軒20人ぐらいいかな。空き家はあってもなかなか手放したり貸したりしない。盆や正月に帰ってきたときに他人が住んでいると困るということ……。子供が外に出てしまって両親も亡くなるというような場合でないと、手放すのはむずかしい」ということであった。つきあいの悪い人が1~2軒あるが、その集落には新しくはいることは難しい。年代は60歳前後だが、40代の人もある。大田村は過疎地だといっても大分空港近辺にはキャノンなど大きい会社がかかなりあるので通勤できる。都会からここまで来た人は、村営住宅の連棟には入りたがらない。

注1：大分県西国東郡大田村。人口1,940人。標高（役場の所）180m。

注2：糸乗の蛇足を加えれば、田舎のつきあいを恐れることはないと思う。新しくきた人間だから100点は取れなくて当たり前だと思えばいい。落第点ぎりぎりでも仕方ないと割り切るべきだと思う。それなりの努力をしていると、田舎の人はかなり寛容に接してくれると思う。以上は私の田舎暮らし一年余の感想。

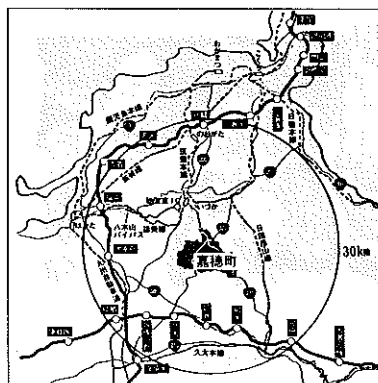
（いとりの さだよし）

工芸家など、いろんな人が移り住み、 面白くなりつつある町・嘉穂町

～移住者受け入れの仕組みと取り組みについて～

山田 龍雄

嘉穂町は筑豊地域の中では、炭鉱を操業していた地域が一部しかなく、今でも豊かな里山と田園風景を残しているところである。歴史的には豊臣秀吉が九州征伐の折りに、急ぎ秋月藩を陥れるため、一夜城を築いたとの記録が残っており、また、「黒田節」のモデルである母里太衛兵の槍が今でも保存されているお寺があることでも有名である。しかし、観光資源といっても



嘉穂町の位置

20数年前に取り組んできたリンゴ園があるのみで、これといったスポットのない町であり、一時期は町を紹介するのに「小石原の隣の町です」と言っていたと聞く。

しかし、5~6年前から少しずつ工芸家などがこの町に移り住み始め、何となく面白そうな町になりつつある。

前々から移住希望者に対しては役場の方が少し積極的にサポートしていると聞いていたのであるが、今回、その中心となって活動されてきた企画課の福田さんに詳しくお話をしていただいた。

●定住できる人、地域活動ができる人は来て欲しい

嘉穂町の場合に移住してくる人は誰でも良いということではなく、町が積極的に受け入れサポートをする人は「週末だけなどの別荘タイプの人ではなく、ちゃんと定住できる人」、「集落でのいろいろな行事などの地域活動ができる人」というように、一定の線を設けている。単に田舎暮らしを求めて移り住み、集落とは無縁で孤立した活動をし、出ていった人がいるとは良く聞く話であり、町としてもこのような人に限定するのは当然であろう。移住者にとっても町の姿勢を確認できるといった意味もあり、メリットがあると思う。

以前、某芸術家らしき人から電話があり、『自分が嘉穂町に来ると町の宣伝になるので、町のためにもなるし、いい物件を紹介して欲しい』といった内容の問い合わせがあったそうだが、町の方としては、受け答えの雰囲気から察して定住は難しい人の方だと考え、断ったこともある。

●町の受け入れ体制の姿勢と移住者を入れた交流会の実施

嘉穂町の移住者受け入れ体制をつくりと移住者の経緯についての概略は下記のとおりである。このような体制づくりを行う以前から、木工職人が2件と牧場をやっている方1件の計3件は既に空き家を借りて活動され

体制づくりの経緯

- ・嘉穂町では年々人口が減少し、元気がなくなりつつある中で平成6年度より町の活性化をねらいとしこれまで自主的にまちづくりに係わってこられたグループの代表者を中心とした「まちづくり委員会」を開催した。
- ・平成7年には、まちづくりに興味のある人を公募し「まちづくり委員会」をさらに拡充した中で、まちづくりのテーマによってグループ分けを行った。
- ・このグループ分けの中から「都市と田舎との交流事業」といったテーマが取り上げられ、田舎暮らしを求める人への対応策が具体的に検討された。
- ・平成7年～8年にかけて役場の方で区長さんをお願いし、空き家調査を行い、さらに空き家の権利者へアンケート調査（主に賃貸意向、売買意向、貸す場合の条件等）を行い、空き家物件台帳を作成した。この時点では既に貸してもよい、あるいは売ってもよいといった物件は29件あったとのこと。
- ・平成8年には空き家の賃貸契約のガイドラインを用意する。
- ・既に10数年前から移住してきていた青木宣人氏（冒険アドバイザー）などの口コミもあって徐々に問い合わせ（受け入れ体制ができる平成7年以前から問い合わせはきていた）がきて、町の方でも物件紹介や空き家持ち主への顔合わせなどを行い、徐々に移り住む人が出た。

移住者の経緯

平成6年以前	木工職人（2件） 牧場経営（1件）	3件 賃貸契約
平成7年 ～12年現在	そば職人 アジア雑貨小売販売 陶芸家（3件）	5件 賃貸契約
	陶板、香炉等の作家 ハム・ソーセージ職人 農家	3件 売買

ていたそうであるが、平成7年以降、受け入れ体制ができたことと併せて移住者が増えている。町としては移住希望者へ空き家権利者を紹介するだけで、具体的な契約行為については本人同士でお願いしているとのことであるが、契約の仕方など具体的な手続きがわからない農家の方のために、契約内容のガイドラインは町の方で用意しており、一応参考にしてもらっているようだ。さらに契約は本人同士といっても慣れない農家の方のためにいろいろなアドバイスをしたりとフォローもしているようである。

また、平成8年から移住者の方と地域づくり団体の人

と役場の方との3者がお互いの情報交換や親睦を目的とした交流会を年2回行っており、これに移住希望の方も参加して先輩移住者の方から体験談や町の様子を聞くなどのふれあいが移住の意志決定の大きな要因となっているようだ。どこに移り住むか悩んでいる移住希望者に対して、事前の人と人とのふれあいを通じての情報交換や親睦は、受け入れ体制サービスの重要な役割を果たしているように感じる。

●空き家での賃貸化できる条件とは？

空き家の賃貸契約は、後継者の方が都会に出ていって全く空き家になっていても盆の墓参りや正月での親戚の集まりなどがあって、家主さんとしてもなかなか貸したくないのであるが、嘉穂町では平成7年以降5件での賃貸契約ができた条件を聞いてみると、次の2つのケースがみられた。

- ・元の居住者の方が近くに新しい家を構え、古い家を使わなくなったケース。（このケースでも使う部屋などに注文はあったとのこと）
- ・嘉穂町には縁が薄くなり、盆の墓参りといったこともなく、貸しても良いといったケース。

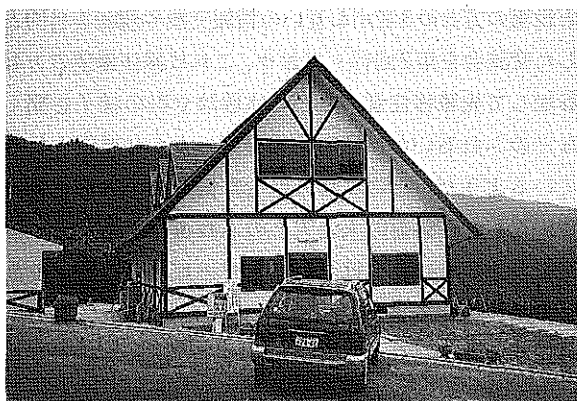
どの町でも嘉穂町のように町の姿勢を示し、条件づくりを行えば空き家でも少しは活用できる物件は出てくるのであろう。

●移住者が来るようになってから町はどうように変わったのか

福田さんに、嘉穂町が気に入って移住してくる人が来て、多少、町に賑わいが出てきて町民の方の意識はどのように変わったのか、あるいは町にとって、どのような効果が見え始めているのかを聞いてみた。

福田さんは「移住者が来つつあることは、町をため池にたとえると、今まで波風立たず平穏だった池に小石を投じたようなものではないか。この小石がそれぞれ波紋を作り、波紋同士が影響し合って大きなうねりができれば良いと思っている。また、町民の方の意識も少しずつ変わってきているように感じている。これまで源流の里づくりの活動の一環として植樹などを行って来て、どちらかというと町外の方の参加が多かったが自分たちの町が注目されていることがわかり出し、徐々に町民の方の参加も増えている。」とその効果が見え始めている。

また、年間4億以上の売上げがある農産物販売所「カッホー馬古屏（まごへい）」や「フルーツ狩り」に来る



オープンしたばかりのハム・ソーセージ工房、お店から下にはリンゴ園が見渡せる

お客さんから「他に見るところがないのか」と尋ねられることがよくあり、以前だとあまり案内するところがなかったが、今はいろいろとバラエティのあるところを案内することが可能になったといった直接的な効果もあるようだ。

●移住者の方の意見—役場の前向きな姿勢と人との縁が最終的な意志決定のポイント。

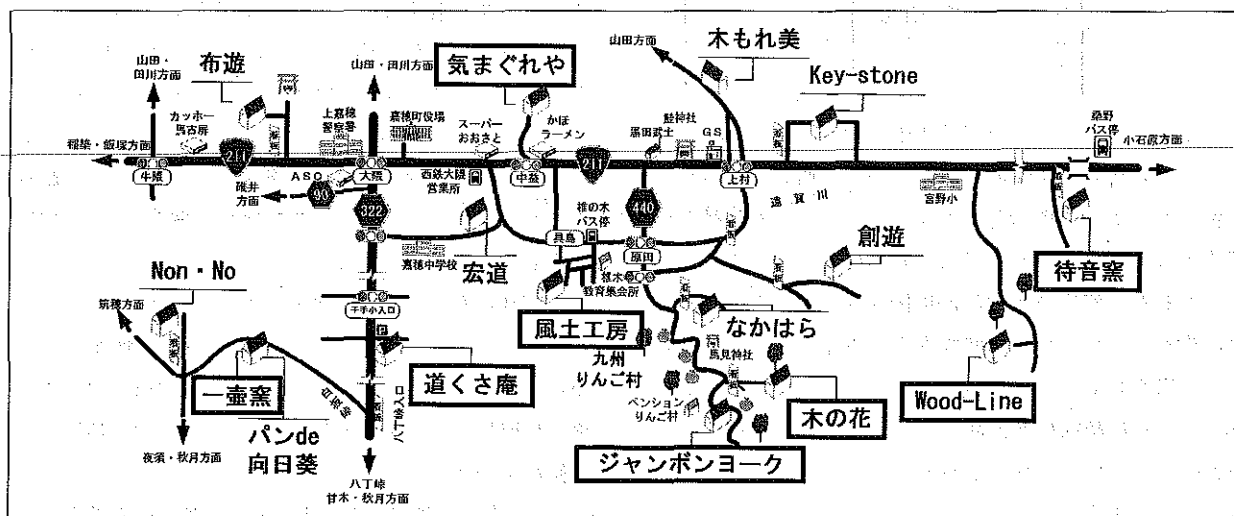
福田さんに紹介されて10月の初めにオープンした手づくりハム・ソーセージ工房の「ジャンボンヨーク」のオーナーである福山さんに何故嘉穂町に選んだのかを聞いてみた。

福山さんは15年前に、大企業型の食品づくりへの疑問などもあって脱サラから手づくりのハム・ソーセージ工房を福岡市博多区で営んでいた。いずれは田舎の方で商売をやりたいと思い、6〜7年前から七山村、田主丸、三ツ瀬村、富士町、唐津市など物件を探し回っていたとこ



空家を改造し、陶芸作品の展示コーナーとしている。ここはまた、喫茶店でもある。

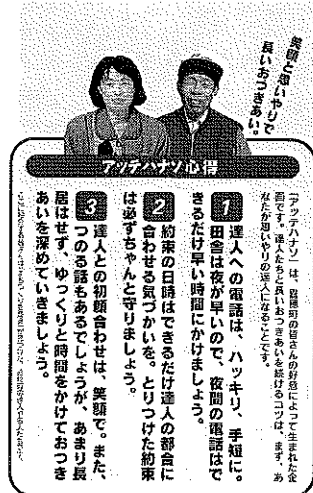
ろ、当時嘉穂町で田舎暮らしをしていた青木宣人さんの「田舎暮らしセミナー」での話を聞き、嘉穂町に興味を持つようになったようで、さらに何度か嘉穂町に足を運ぶうちに先ほど説明した交流会に招かれ、何となく地域になじんでいったとのこと。福山さんとしては、当初嘉穂町は山に囲まれ、1時間圏で考えるとすべて山越えをしないと行けないといったデメリットがあると感じていたが、今は高速道路も整備され嘉穂町から鳥栖市、福岡市、筑紫野市や小郡市も充分1時間圏に入るところでなので、距離的な抵抗感も薄らぎ、嘉穂町を拠点とすることを決意したそうである。私が訪ねたときには、まだオープン前でお店も準備中といった感じであったが、ハムづくりの講話も含めて2時間近くも話をしていただいた。ご馳走になったロースハムとささみの薫製は程良く薫製の香りがして美味であった。



嘉穂町のグルグルマップ「よその会」が自主的に制作。□ 枠囲みしているものが移住してきた人が営んでいる工房又はお店



左：達人紹介マップ「アッテハナソ」
右：アッテハナソ心得



昨年の5月に太宰府から嘉穂町に移り住んで来られた前田さんは、主に陶芸と銀粘土細工（奥さんが指導・製作）を行っている。田舎の方での活動を決心して10数件選んでいるうちに先に移住していたそば職人の進さんと知り合って嘉穂町を知ったとのこと。

また、町役場を訪ねたときに町の前向きな姿勢や対応が良かったこともあって、嘉穂町でなくてもよかったのであるが、何故かそのときの縁とタイミングで嘉穂町に決めたようだ。前田さんはお客さんにできるだけ多く来てもらえるように工房めぐりや音楽会などのイベントを仕掛けているが、工房仲間の立場や意見も違うことから統一したルールづくりの難しさを言われていた。また、前田さんを訪ねてくる人が「いろいろ工房をみて回ったがどこも閉店であった」との苦情も聞けらしい。お客さんの立場から考えると、営業の有無を知らせるインフォメーションの拠点がどこかにあると、より便利に魅力ある工房巡りができるのではないかなと思う。

●より魅力づくりに役だっている達人紹介マップの取り組み

企画課の福田さんは、さらに平成11年度に都市との交流の仕掛けに昔から町に住んでいる達人、移住してきた達人などの方を発信し、興味をもった人が直接達人に連絡して達人の講話を聞けるような仕組みづくりを行っている。

福田さんは地域づくりの仲間と一緒に達人を一人ひとりを訪ねて事業協力を口説いたとのことであるが、最初は誰も自分のことを達人とは思っておらず、また、高尚な話もできないとのことで遠慮される方がほとんど

であったが、足繁く通い「普段やっていることをそのまましゃべってもらえればお客さんも喜ぶ」と言いながら納得してもらい、マップづくりに協力していただいた。今、陶芸、そば体験、木工などのものづくりの達人の方に問い合わせが多く、歴史や山・植物などの達人はいまひとつ人気がないとのことである。

このような取り組みは、観光地といった場所を訪ねる観光ではなく、達人という人を訪ねる観光であり、まさに人と人とのネットワーク観光なのかも知れない。人とのつながりから地域の魅力が出てくるように感じる。

（やまだ たつお）

都市・農村交流の手始めは棚田から

～福岡県浮羽町の棚田オーナー制度～

小田 好一

福岡県内のある村でまちづくり計画のお手伝いをしていて、村のあちこちを案内していただいたのだが、棚田の荒廃が進んでいるのが目に焼き付いていて、これらの棚田をきれいに整備しなおして、村や集落の活性化材料には使えないだろうか、と思ったのがきっかけで棚田のことをいろいろと調べてみた。

棚田の活性化といえば棚田オーナー制度（※1）が知られている。9月13、14日に福岡県浮羽町にて「全国棚田サミット」が開催され、棚田オーナー制度についても事例報告があった。

棚田オーナー制度は平成11年現在で全国22地区、25ヶ所で行われている。棚田サミット2日目の中島峰弘さん（早大教授・棚田学会副学長）の基調講演では棚田

棚田オーナー制度の5つの類型

- ①田植え、草取り、稲刈りなど農業体験に重きがおかれるもの。例：会費約4万円、区画なし、特典は玄米30kg、季節の作物
- ②農業体験もできるが一家の飯米確保に重きがおかれたもの。例：会費9万円、区画500㎡、特典は玄米180kg
- ③農業体験が発展して、作業＋イベント等の来訪が4～10回のもの。例：会費約4万円、区画100㎡、特典は区画内での全収穫物
- ④作業＋イベントで来訪が10回以上のもの。例：会費5～6万円、区画600～800㎡、特典は全収穫物（玄米約250kg）
- ⑤農業体験はなく、経済的支援を行い、収穫物の一部をもらうもの。オーナー制度への発展もあり得る。例：会費3万円、経済的支援のみ、特典は白米30kg

オーナー制度の全国展開について9頁右下の表のような紹介があった。

●オーナー制度は都市農村交流がベースにある

オーナー制度は都市住民の来訪の回数、農地面積により5つの類型ができる。

各分類の代表的事例を見るとお分かりだと思うが、会費・区画・特典は全国でまちまちである。このような全国展開の中、福岡県浮羽町でも福岡県内で唯一、棚田オーナー制度を行っているが、どのように行われているのか、オーナー制度導入に至るまでの経緯など、オーナー制度を担当する浮羽町役場企画振興課の瀧内さんにお聞きすることができた。

●棚田はグリーンツーリズム推進の突破口

浮羽町では平成6年に町の活性化には農業の振興が不可欠であるとして「浮羽町ふるさと農業活性化推進協議会」を設立。翌年には「浮羽町ふるさと農業活性化基本構想」が策定され、全町民挙げて「都市との交流・連携による活性化」の取り組みが開始された。

瀧内さんは次のような計算式を提示された。交流人口＝大都市圏人口×移動時間の魅力（短いほど大きい）×地域資源×都市圏住民の農村への欲求×情報発信である。これらのどれが欠けても、交流人口に影響が出るという計算式である。浮羽町についてみると、福岡都市圏の人口は約200万人、福岡都市圏から高速を利用して約1時間の距離、地域資源（※2）は豊富、都市圏住民の農村への欲求（数字では図れないが福岡都市圏の人口と比例するものとしている）は揃っており、あとは情報発信である。福岡県内はテレビ局が7社、新聞社も多数ある。また、タウン誌も大手2社をはじめ、



毎年、九月頃になると、彼岸花が咲き乱れる。彼岸花は根にある毒によってモグラから棚田を守っているそうだ。

様々な地域情報誌がある。福岡県内のテレビ局は、九州他県と比較して地元番組の枠を数多く持っているため、県内各地域からの情報発信には好都合である。また、テレビや新聞の報道はオーナー、農家の方々がそれぞれ互いに伝えにくいことを代弁してくれることがあり、お互いの理解を深める効果があったそうだ。県内の情報発信の条件を考えると浮羽町は非常に好条件であり、先ほどの交流人口の計算式から分かるように浮羽町は全国的に見ても好条件であるということを瀧内さんは強調されていた。事実、何かある度に短縮ダイヤルが登録された多くのマスコミに対し、PRのためのFAXを流しているそうだ。このようなマメさが必要みたいだ。

●棚田オーナー制度の導入に至るまで

同町の葛籠（つづら）地区は棚田の広がる静かな山間部であるが、かつて約50戸あった集落が今では10戸を残すのみとなっていた。オーナー制度は同町が棚田を所有する葛籠地区の農家への呼びかけから始まった。初めは農家の方々も職員の呼びかけに半信半疑だったという。それでも時間をかけて、少し強引なくらいに農家の方を説得し、オーナー制度導入にこぎつけた。

●オーナー、地元農家の反応はどうか

ここまでで気になるのは、①参加したオーナーの感想、②地元の農家の感想、また、③オーナー制度によって地元（地域、農家）が潤っているかということである。①のオーナーの意向については2つの表を参考にしたいと思う。表1をみると、1期目の加入者は翌々年には半数以下になっており、3期目の加入者をみると42人の新規加入がある。ある程度の入れ替わりはあるようだ。また、オーナーや農業体験を指導する農家に対してアンケートをとって率直な意見を聞いている。それによってオーナー制度も少しずつ改善されている部分があるのか、表2で示す継続率がアップしている。

表1 加入時別の加入者数の推移(人)

	1期目より加入	2期目より加入	3期目より加入	計
1期目加入者	75			75
2期目加入者	45	19		64
3期目加入者	34	15	42	91

表2 加入者の継続率の状況

	継続 (人) (a)	不継続 (人) (b)	合計 (人) (c=a+b)	継続率 (%) (a/c)
1期目加入者の2期目加入の状況	45	30	75	60.0
2期目加入者の3期目加入の状況	49	15	64	76.6

②の地元農家に対してアンケートをとっているが、その感想をみると、田植え祭、収穫祭での感激の声、産地直送の収穫物に対する喜びの声を聞いて、また次も頑張りたいという意見が多く挙げられていた。

最後に③の、どんな仕組みで地元にお金が落ちているかということについてだが、平成12年の例をみると、一口4万円の会費×92口＝368万円が事務局に入金される。続いて会員に対して米を10kg×3回＝30kg送ることになるのだが、米30kgを14,000円で農家から事務局が購入する。また、山の幸は年4回送られ、4,000円、2,000、2,000、3,500円の計11,500円を農家から事務局が購入する。農家1戸あたりの割り当てを平均9口とすると、(14,000＋11,500)×9＝229,500円が農家1戸あたりの棚田オーナー制度による収入となる。田植え、収穫以外の稲の手間賃を考えると割に合わないが、オーナーからの喜びの声などで農家の方が元気づけられていることをみると、地元にとってはプラスになっているように思える。また、9月中旬に当地区で行われる「彼岸花めぐり」や、その他の町内観光にも波及効果は大きいという。さらに、当町では現在のオーナー制度が好評であることから、農業体験版を少し発展させたもの（来訪回数が多くなる）も計画しているそうだ。もう一つ、私の気になるところとしては、後継ぎ問題である。現在、約半数の農家は後継ぎがいる

浮羽町のオーナー制度の概要

地区：浮羽町葛籠（つづら）（農家戸数10戸）
 特徴：当地区の棚田は全国棚田百選に選定されている
 当地区は農業体験に重きがおかれる
 会員：92口（平成12年）
 区画：オーナーに与えられる区画はない
 来訪：田植え（5月開催の田植え祭）
 稲刈り（9月開催の収穫祭）
 いずれも、地元農家の指導を受けながら農業体験する
 特典：
 ①棚田米 精米した状態で10、11、12月の3回に分けて10kgずつ送られてくる。
 ②「山の幸」オリジナル商品 葛籠地区の農家の女性グループ「山の幸」は、地元の新鮮な野菜や山菜などの加工品づくりに励んでいる。それら、自信の品々を直送。
 ③新鮮なフルーツ（梨や柿）
 ④四季の含ながいわ利用券：3,000円分
 同施設は公設民営の棚田に隣接する地域活性化施設で飲食店、特産品売店、浴場がある。
 運営主体：浮羽町棚田保全協議会
 （事務局 浮羽町役場企画振興課）

ということだが、残りの半数が農業をやめてしまったらどうなるのかということだった。今のところ、葛籠地区の農家の親戚が面倒をみるということしか対処がないということだが、農業の知識があまりない私なりに考えたのは、来訪回数の多いオーナー制度をさらに発展させ、徐々に来訪回数を増やし、オーナーの育成を行い、時間がかかると思うが最終的に移住して棚田農業の担い手になることも考えられるのではと思った。

今回のヒアリングでは、棚田オーナー制度の導入までの経緯と現状を知ることができたが、参加してみないと分からないことが多いと思う。機会があれば是非参加してみたいと思う。（おだ こういち）

※1 棚田オーナー制度：1枚の田の規模が小規模で、機械が入らず、高低差も激しく、生産効率の悪い棚田はかつて「お荷物」的な存在であったが、その棚田の美しい光景、地下水かん養、水質浄化の役割が見直され、棚田保全、活性化のための取り組みとして、1992年高知県橋原（ゆすはら）町神在居（かんざいこ）地区において全国に先駆けて棚田オーナー制度が始まった。棚田のオーナー（会員）を募り、田植え、稲刈りなどの農業体験、作業手伝いをしてもらう。収穫物の全部もしくは一部が会員に還元される。

※2 地域資源：浮羽町は日本の棚田百選「葛籠地区」のほか日本名水百選「清水湧水」、全国水源の森百選「調音の滝公園」、福岡県森林浴百選「奇岩と景勝の長岩」と自然に恵まれている。このほかフルーツ狩りが有名である。

地域を変える障害者3

地域の認知度が高い作業所

～福岡県福岡市小規模作業所サンテラス

澤谷 真紀子

●お母さん達が「あんなところが欲しい」と口々にいう作業所

ある町で障害のある子どもの親（お父さんは1人だったが）に集まっていた。子どもが学校卒業後に行きところがない、ということは共通の大きな課題だ。

卒業後の行き先としては一般に、「進学」「就職」が考えられるが、障害をもつ子どもの場合、これらに「在宅」「施設入所」等が加わる。就職の難しい重度重複（身体障害、知的障害のどちらもある）障害の人などは特に行き場がない。高齢者では寝たきりにならないよう、デイサービス・デイケア、宅老所などの受け皿が多くある。そこでは色々な人と会い、変化のある生活を送ることができ、しかも、家族の負担が軽くなるなどのメリットがある。一方、障害のある人の受け皿として、デイサービスや作業所はあるが、施設数や運営資金面等での課題が多い。

今回は、お母さん達から理想の作業所としてあげられていた「福間サンテラス」に行き、父母の会（※）から立ち上げまで中心人物として関わり、現在、作業所の所長である小峯寿々子さんにお話をうかがった。

作業所は今年2月にオープンした福間町健康福祉総合センターの障害者作業訓練センターにある。

※）養護学校で知り合った親が集まったり、行政が先導して障害のある子どもの親を集めた「父母の会（親の会）」は多くの地域にある。

●親と子が一緒に働きかけることが最初の一步

福間サンテラスは、福岡市からJR（快速）で20分の福間町にある。はじまりは20年以上前、父母の会で集まり、色々な悩みを話し合っていた中で、養護学校を卒業して親も子も集まる場が欲しい、という一致した意見があったことだった。それを実現するため、ある行動を起こした。

それは、障害とはどういうことかを知ってもらうため、子どもを連れて役場にお願ひに行くことだった。子どもを連れて行くことがポイントだ。近所の人に何といわれるか……といった抵抗は親にもあったらしい。しかし、それを乗り越えなければ必要性がわかってもらえない、という気持ちで何度も押しかけたそうだ。

そして、1982年、障害者年の事業として町より福祉センターの1室を提供して貰い、運営は父母の会に任された福間サンテラスを設立した。親が交代で責任を持ち、週に1日集まり洗濯バサミの組み立てから始めた。

●3年後に職員1名雇用、この人の生活がかかっているという意識が芽生えた

隣接する宗像市には福岡教育大学が立地し、ボランティアとして学生が多く関わったことも運営の助けと



この日は近くの中학생も参加してのレクリエーションの日だった

なっている。また、設立年には福岡県心身障害者共同作業所運営補助金（町30万円／年、県30万円／年）を受け運営にあてた。

3年経過し、当時ボランティアで来ていた学生を非常勤職員としてスカウトした。当時、問題となっていたのは、親の力量も違うため、会の輪を保つことが難しくなっていたことだった。1名雇用することで、職員の生活がかかっているからやっぱりがんばらないと、という一体感が生まれた。

●まず、実績を作ってから役場に相談する体制

現在、通所者15名に対し、職員数7名（非常勤含む、内1名は看護士資格保有）で対応している。定員に対しこれだけの職員数を確保しなければならない、というのではなく、その時々に必要な人を順次雇っていたらこれだけの人数になったとのことだ。

例えば、8年後には職員2名分として補助金が240万円に増えるのだが、必要だからということで3名雇用し、1～2年間は、足りない分はがんばってバザーで収入を得たり、親が手出しをしたりしていた。その実績を積んで役場に「やはり、これだけは足りないんです」と相談に行った。

●周りの人が必要性を認めていた

当初、福祉センターの1室に設けられたこともよかった。部屋は狭いが多い人の出入りがあるため、多くの人が見て、知る機会をもつ。その中で「あのスペースはやはり必要だ」「狭くてかわいそうで見てられない。もっと広いところはないか」「あのスペースにこそ町が応援してもよいのでは」など肯定的な意見が聞かれるようになり、自然と地域に認められていった。また、センターを運営する社会福祉協議会と活動面の連携がとれたことも運営上の大きな力となった。

行政の協力も大きい。小規模作業所は国、県、市町村より補助金が出ることとなっているが、実際は市町村が半分を負担しないと国、県からの補助はない。そのため、補助金無しで運営している作業所も多い。福間町の場合は、サンテラスと話し合いながら、職員給与として、必要な支援をしている。当初は30万円／年であったものが徐々に増え、18年経過した現在では約1000万円／年となっている。また、作業所の運営委員会に町福祉課からも参加していることは珍しいケースだ。資金面、運営面など大きなバックアップ体制がとられているようだ。

●子どもがずっと暮らしていくためにいごちの良 い町にしたいという強い思いがある

ここで、何故お母さん達が「このようなところが欲しい」というのか考えてみた、サンテラスの指導員さんによると、重度の障害のある人も通える施設だからではないか、と教えてくれた。それにプラスし、理念がしっかりしているため、このような父母の会に入り、一緒に取り組んで行きたいと感じたのではないかと考えた。

小峯さんとお話していると、小峯語録とでもいうようなすばらしい思いが出てくる。例えば、「子どもには行くところがない、じゃあここでどうしたら良いかを考えた」「ずぶの素人の主婦がわからないなりに聞きながら頼りながらやってきた」「きついけど支えてくれる人が一杯いた」「障害のある人や家族同士が助け合えないと訴えられない」「この子達が暮らすためにいごちの良いい町にしたい」などだ。

『次の世代が暮らしやすいまちであるように、わからないなりに仲間を作って色々な人に聞きながら、頼りながら一步一步取り組んでいく』、決して行政が作った器にどっかりと座らないで、自分たちで汗をかいて周りを巻き込んでいく姿勢にまちづくりの本来の姿を見た気がした。(さわたにまきこ)

【施設概要】

- ・設置主体：福岡町社会福祉協議会
- ・実施主体：福岡町心身障害者共同作業所「福岡サンテラス」父母の会
- ・運営主体：福岡サンテラス運営委員会
- ・定員：20名、現在15名登録
- ・職員：所長、職員7名（内非常勤2名）
- ・通所年齢：15～64歳
- ・通所条件：福岡町在住者
- ・通所者：身体障害のある人6割、4割は知的障害・精神障害のある人又は重複障害のある人
- ・負担金：10,000円/年・人
- ・作業内容：布きん縫製、牛乳パックリサイクルの手漉き和紙づくり、名刺印刷
- ・その他：
 - ・親は子どもの働く場所には入らない、しかし、週に1回集まり子どもの出来ない作業部分を別の部屋で手伝う
 - ・子どもの障害に応じて親の作業量を区別することはない

第64回地域ゼミ

『いのちの営みに沿った農への取り組み ～自然な食べ物、農について考える』

尾崎 正利

さる9月12日に福岡で「自然農」の実践活動を行っているグループの中心的存在である松尾靖子さん（前原市在住）、そして松尾さんと一緒に活動しているメンバー（三舛信明さん、村山直通さん）を囲んで、食べ物や農への取り組み、自然と人の関わりなどについて考えてみようということで、ゼミを開くことになった。

●自然農とはどんな農法か？

私自身は今年4月に「自然農」についての映画鑑賞会を一回見たそれっきりの知識しかないのだが、ひとことと言えば「耕さず、草や虫を敵とせず、肥料・農薬も必要としない生命の営みにそった農」とでも言えば当たっているだろうか。

この日はまずはじめに以前テレビで紹介された「自然農」に関する番組のビデオを見て、その後、松尾さんと三舛さん、村山さんの説明がなされた。ビデオでは奈良県で「自然農」を実践なさっている川口由一さんの田圃が取り上げられていた。以前、私が見た映画も川口さんの「自然農」の一年をみるという内容だった。草ぼうぼうでどこに稲が生えているか分からないような田圃だが、一つひとつの稲の根は普通のものよりもずっと遅しい。米になった味も良いという。

松尾さんからは以下のような話がなされた。

- ・もとはOLだったが農家に嫁いだことで、農業に関わるようになった。
- ・普通の農業をやっていたのだが楽しくなかった。というのは生産性を上げるために農薬をふんだんに使えば、作っている人間の健康も脅かしかねない。人間も野菜も健康に育てるというこだわりが、なかなかできなかった。
- ・そこで6年間は有機農業に関わって、個人契約の野菜販売で100名ほどお得意さんも出来たが、元来その土地になかった肥料を持ち込むことに違和感があった。
- ・結局、お客がゼロになっても納得できる農法を追求したいと考えて自然農と出会うことになった。
- ・最初は別の集落で畑を借り取り組んでいたが、あまりの草ぼうぼうに貸してくれた人から返すよう求めてきたこともある。

・その間、自分のお金で何度も奈良県まで行って、川口さんのところで「自然農」を学んだ。

●農・いのち・自然についていろんな意見。

松尾さんと一緒に活動している三舂さん、村山さんは「福岡自然農塾」のメンバーで通信「いのち」を発行している。お二人は「自然農」を通じて、食と人間の関わり、人間と自然の関わり、農と人間の関わりなどについて、生活のあり方を問い直すという意見を持っておられた。

今回のゼミは、身近に感じられるテーマでもあったので、出席者は、まちづくりに関わる仕事をしている方、自分の意志で農村に住むようになった方、農業や食料問題などに詳しい方、行政に関わる方など、20名もの出席がみられた。意見交換や実践報告として以下のようなものが出された。

・食べ物をつくるということはどんな職種でも必要な生活の基礎的なものと思っていたので、東京で生まれ育ったことに不安を感じていた。今は親の実家に近い縁で糸島方面に住んで、野菜を作り豚を育てているが、親の定年後の夢を先駆けているような気がする。

・楽しそうに農業している人は後継ぎが多い。結局、生産者が自分で納得できることをやるのがどんな職種でも必要だ。

・「自然農」は効率性重視の農業とは、時間と手間の面が最も違うような気がするが、自然の中の一部を人間が農として使わせてもらっているという気分は、代々の農家よりも都市住民の方に受け入れられやすいのではないか。

・機械や農薬など重装備型の農業以外に、作物が立派に育つのをみてびっくりした。

・しかるべき土地と指導者がいれば、農作業したいという人はかなり多いと思う。農山村の活力といっても地元の若い人は一度は都会に出てみたい。反対に都会で暮らしてきた人は田舎に魅力を感じている。そういう人を新戦力として呼び込めるかどうか、農山村の後継ぎ問題のポイントではないか。

・週末農業をやっているが結局は「草」との戦いだ。草とりの手間さえ軽減できればかなり頑張れる。自然農は手間がかなりかかりそうだ。結局、時間と健康のバランスシートの問題だ。（おぎき まさとし）

旬のはなし② ～魚～

生産地と消費地の密接度が

価格につながるようだ

澤谷 真紀子

魚の旬はどうなっているのだろうか。漁業白書によると、我が国では、農作物同様、魚介類の自給率も年々減少している。平成10年には国内生産量4,626千tに対し、輸入量が3,667千t、自給率は57%となっている。知らない間に、魚のフライや天ぷら、ミンチなどの加工食品だけではなく、冷凍技術の発達したことにより生食用の魚までもが店頭に並んでいる。

ここまで輸入品が増えると、市場に出回る魚の量の安定性はかなり保たれている。

仕事で訪れた対馬で、元気な漁師さんと知り合った。魚の旬について聞くと、「たいていの魚は産卵前の一番脂肪が乗りきった時期、つまり12月～2月が一番おいしい」と教えてくれた。対馬は「さば」「ぶり」「たい」「あじ」の漁獲量が多いところである。漁獲量としては、長崎県は全国の約1割を占め、対馬は長崎県の約1割を

占めている。これらの魚種の価格変動（卸価格）について水産物流通統計年報でみてみた（右頁の図）。

この統計の数字は、全国2,263漁業地区の内の主要42漁業と、年間市場価格調査対象となっている164漁港に水揚げされた水産物のもので、輸入品の取引は含まれていない。いわば、国内で獲れた魚の平均価格である。これをみると、4魚種とも価格は季節変動が少なく安定している。若干の変化が「たい」だけだ。やはり、輸入物の影響かもしれない。また、国内産では養殖ものも含まれることを考えると、結局は魚の需要と供給のバランスが保たれているとみることができる。

ちなみに、先ほどの漁師さんがいる対馬の厳原漁港の魚価では次のような特徴があげられる。

・厳原漁港の魚価は4魚種ともに1kg当たりの価格帯が全国平均よりも高い。最高値の差を比較すると、さ

食用魚介類の自給率等の推移

	平成元年	6年	7年	8年	9年	10年 (速報)
自給率	79	59	59	58	60	57
国内生産量	6,961	5,232	5,255	5,061	5,009	4,626
輸入量	2,494	3,776	3,872	3,922	3,881	3,667
輸出量	558	286	263	320	410	321

資料：漁業白書（平成11年度）

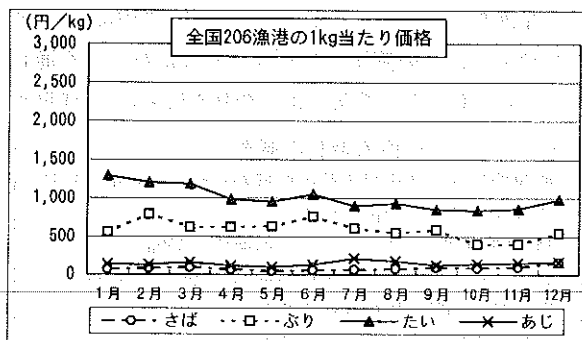
ばで1441円、ぶりで246円、たいで1386円、あじで1320円で段違いに厳原が高くなっている。

・魚がおいしい時期(12～2月)と実勢の価格変動との差をみると、魚価の最高値がおいしい時期と合致するのは全国平均の場合、「さば」「ぶり」「たい」であるのに対し、厳原では「たい」の1月だけとなっている。また、最高値の月が合致しているのは「たい」だけで、他は1～3か月ずれている。厳原の「さば」は2か月早め、「ぶり」は1か月遅め、「あじ」は3か月早めだ。

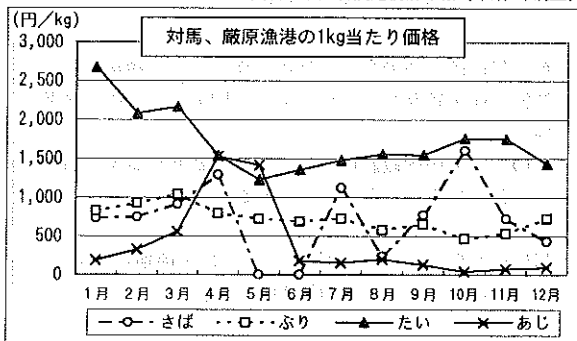
対馬の魚は、荒波にもまれた引き締まった魚、という自然の恵み自体が市場価格の引き上げに貢献していることもあるが、「さば」「ぶり」「あじ」など対馬のこの時期にとれるものは、12～2月のものに負けないくらい品質もよく、量も揃っている。これに加え、漁師さん自体のがんばりもある。冒頭の漁師さんの集落では、鮮魚運搬船を購入し、いかに鮮度を保ちながら、大量の魚を市場に送り込むかについて日夜努力している。個人の漁家では難しいことでも、集落単位、共同体単位の取り組みで市場評価を高めているようだ。

今、対馬では、生産地と消費地をどれだけ密接につなげるかが大きな課題になっている。今の集落単位の取り組みから町全体、対馬全体に広げること、また、他産業と連携した生産地としての売り込み方について検討しようとしている。(さわたに まきこ)

魚種別の1kg当たりの卸価格
厳原のタイは高いときで2700円、アジは春が高い



資料：水産物流通統計年報(平成7年調査)



資料：厳原町(平成10年調査)

近くて、近くなってきた国

近くて、まだまだ遠い国

～韓国・中国1日ホームステイ報告～

小田 好一

「九州青年の船」というのをご存じだろうか。船で中国・韓国へ行き、国際交流などを通じて地域づくりのリーダー育成をする事業である。1972年の開始以来今年で28回目である。以前は船で行っていたのが、ここ2～3年で飛行機に変わり、名称も新しく「ヤングネットワーク九州2000」になった。ある事情があって急遽参加することになった。各県30名(男女各15名)×九州・沖縄8県+各県職員+添乗員、写真、映像スタッフで総勢280名ほどの大団体で、団長は主催県(毎年各県持ち回り)の県知事(今年は熊本県の塩谷知事。来年は福岡県)である。日程は次のようになっている。

- 8/19 熊本県内のホテルで事前研修
- 8/20 ソウル着 ホストファミリー宅へ
- 8/21 ソウル市内 韓国大学生との市内観光
- 8/22 天津着 西双塘村でホームステイ
- 8/23 万里の長城、北京へ
- 8/24 北京市内 中国人学生との市内観光
- 8/25 熊本着
- 8/26 熊本県内のホテルで事後研修

●はじめての韓国ホームステイ

韓国ではソウル市内でホームステイ(たった1泊なのでホームステイといえるかどうか分からないが..)があった。ホストファミリーの大学生は、片言の日本語を話すことができ、少し安心した。ホストファミリー1家庭につき日本人2人がお世話になる。まず家に入ってから第一印象は、「日本の家とほとんど変わらない」ことであった。本棚に百科事典が並ぶなど一昔前の家庭ではよくあった光景である。

夜はこの家庭のお父さんも帰宅し、お酒を戴きながら片言の英語で会話した。どこから来たか、どんな仕事をしているか、などいろんな会話をしていると、史上初の韓国・北朝鮮首脳会談を終えたばかりの北朝鮮の話になり、お父さんは「北朝鮮をどう思うか」と私たちに問いかけてきた。「韓国と北朝鮮はもっと仲良くなってほしい」というと「私もそう思う」と言われた。もっと英語か韓国語ができれば、掘り下げた内容を話

し合うことができたのだろうが、私の英語ではこれが精一杯だった。

最初はビールを飲んでしたが、そのうち真露（ジンロ：韓国の焼酎）になり、最後は梅酒が出てきた。この家に入ったときから本棚に梅酒らしきものが漬けてあるのがとても気になっていたが、やはり正真正銘の梅酒であった。後に日本語のできるバスガイドさんに聞いた話だが、韓国の人は健康に関してとても関心が高く、「梅酒は健康に良い」ということが広まり、最近ブームになっているそうだ。私はてっきり古来、韓国の梅酒文化が日本に渡ってきて今日の日本の梅酒があるのかと思ったが逆であった。

●韓国版バレンタインデー

バレンタインデーに続く愛情表現の行事が年中通じてあることを、韓国に留学していたという団員から少し聞いていた。ホームステイ中に詳しく聞くことができたので、4月～1月の韓国版愛情表現行事

4/14：ブラックデー

彼女のいない男性、彼氏のいない女性がそれぞれ男2人、女2人のペアになって、ジャージャー麺を食べる。日本のジャージャー麺はミンチをベースとする茶色に近いものが上についているが、韓国のジャージャー麺は真っ黒なミートソースがかかっている。ペアの服装も黒一色である。町中で黒い服を着た男女がジャージャー麺を食べていたら、彼氏、彼女のいない証拠であり、彼氏、彼女募集中のサインとなるわけである。

5/14：ローズデー

男性が好きな女性に愛の告白とともにバラをプレゼントする

6/14：キスデー

付き合っている男女がキスをする。

7/14：シルバーデー

何か銀色のものをプレゼントする。（指輪など）

8/14：グリーンデー

公園の木陰や森にピクニックに行く。

9/14：フォトデー

愛し合っている二人で写真を撮る。

10/14：レッドデー

恋人がいる場合は二人で赤ワインを飲む。
恋人がいない場合は、トッポッキー（一口サイズの餅のようなもののチリソースあえ）

11/14：オレンジ&ムービーデー

カップルで映画鑑賞し、オレンジジュースを飲む。

12/14：Hug（抱きしめる）デー

カップルが抱き合う。（クリスマスが近いから!）

1/14：DIARY（日記帳）デー

これからも一年間よろしく、ということで日記帳を贈る。

きたので、ご紹介しよう。バレンタインデーは2/14に女性からの愛情表現で男性にチョコレートをプレゼントする。これは日韓同じであるが、韓国には「義理チョコ」はないそうである。続いて、3/14はホワイトデー。日本では男性から女性へマシュマロをプレゼントというのがあるが、これはあまり浸透しておらず、プレゼントなら何でも可になっている。韓国ではキャンディーを男性から女性に送るそうだ。ここまではあまり変わらないが韓国版愛情表現行事はここからである。

2～5月の行事はかなり浸透しているようだが、6月以降はホストファミリーの大学生が携帯電話で友達に聞いていたことなので浸透しているかどうかは定かでない。バレンタインのチョコレート業界に続けとばかりに各業界頑張っているようである。

●ホームステイを地域ぐるみで受け入れる村

中国ではまず、天津に入り、そこからパトカーに先導されながらノンストップで西双塘村（せいそうとうそん）にたどり着いた。村に着くと歓迎の踊りが披露され、入村式にて、記念植樹、村長や共産党議員のあいさつが行われた。

入村式が終わり、早速、ホストファミリー宅へ向かったが、異様な光景だった。全く同じ家が300軒も建っているのである。ここに来るまで周囲の農村は煉瓦造の簡素なものだったが、この村の光景は全く周囲とは異なっていた。家の中に入り、お互いの紹介が終わると早速食事が始まった。もちろん私は中国語が話せないの、片言の英語で話そうと思ったが、全く通じなかった。仕方なく筆談による会話をを行った。「我思食

西双塘村の概要

- ・西双塘村は天津市静海県の県域から南へ6 km、天津市内から60 kmの位置にある。
- ・村は266世帯、1,073人在住、面積約4,000ha
- ・村の工業と農業の総収入は67億円（1995年）に達して国に4億1,500万円の税金を出した。
- ・主要作物はトウモロコシ、小麦
- ・1995年、村の委員会は国家民政部に「進んでいる委員会」と表彰された。
- ・今、村には6つの会社、16の工場（冶金、機械製造、紡績、商業貿易等）を持っていて国家クラスの企業集団になった。
- ・そのことで中国政府に「最佳経済效益卿鎮企業」（経済利益が最も多い農村でつくられた企業）と命名された。
- ・村は約6億円かけて300棟からなる住宅団地を建てた。1世帯の建坪240㎡、敷地400㎡。

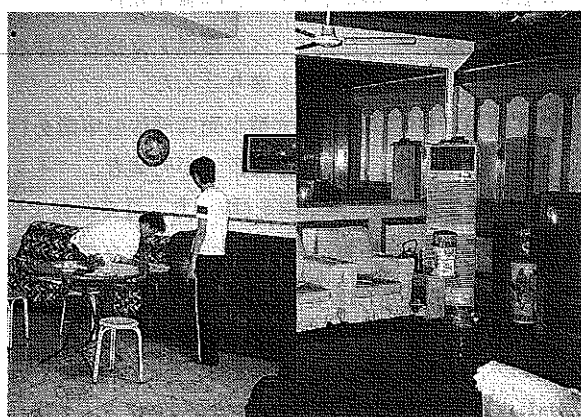


全く同じ形をした家が300軒建て並んでいる

物美味」など紙に適当に漢字を並べたのだが簡単な内容は通じた。この村は謎だらけなので聞きたいことがたくさんあった。周囲の農村は簡素な建物なのに、ここだけなぜ豪華な住宅街が建ち並んでいるのか。どのような経緯でホームステイをするようになったのか。噂で外貨獲得のための村とも聞いているがどのようにお金がおちているのか。

日本に帰国してから、様々な経路で情報集めを行ったが限界があった。現在私が持っている最大限の情報を書くことにする。

- ・かつて土地も農業機械も国有（人民公社）、収穫量が多くても所得は変わらなかった。作物についても人民公社で決められたものを栽培していた。
- ・改革開放政策によって農業についても、個人に耕作権が認められ、カネになるものを栽培する動きがでてきた。
- ・西双塘村では日本向けの作物を栽培し、日本の商社と取り引きするようになった。そうすることによって個人所得が上がり、村全体でも万元戸（年間一万元以上稼ぐ世帯）が増えた。



内装は家によって様々であった。

- ・立派な家を建設したため、各戸、空き部屋ができた。
- ・ここまで発展してきた村を広く世界に知ってもらおうと村全体で、民宿をすることになった。
- ・宿泊の受け入れをする際、一人あたりホテル並みの料金をエージェントから村にまとめて払われるそうだが、どのように各戸に配分されるのかは分からなかった。
- ・中国の内陸部ではこのような万元戸が多数いる非常に潤った村が少しずつ出てきているという。

夜になると、再び歓迎の舞が村の目抜き通りで始まり、2時間ほど続いた。泊めていただいた家のお兄さんも踊りを踊るということだった。踊りが一人前になるまでに2年しかかかると言っていた。翌日、お別れの時がきたが結局この時まで思うように会話ができなかった。会話ができないと情がわからない。あっさりした別れであった。

韓国では携帯電話が日本と同様に普及しており、インターネットについても普及している。ホストファミリーの学生は自分のデジカメで撮った写真を電子メールで送ってくれた。ソウル市内観光では「インターネットで知り合った」という彼女を連れてきた。住居についてもほとんど違和感を感じないくらい水準になっていた。これらだけで判断するのは短絡的だとは思いますが少なくとも私は、かつて近くて遠いと言われていた韓国がだいぶ近づいているような気がした。一方、中国は福岡在住の中国人の知り合いを通じても西双塘村の情報が思うように入らなかった。近くてまだまだ遠い国である。（おだ こういち）

第3セクター研究会活動報告

『建物を壊さずに、まちの賑わい拠点を
リニューアル〜太宰府市いきいき情報センター』

尾崎 正利

九州でも大型店の閉店を伝えるニュースを目にする。閉店後の建物については、崩して更地や駐車場にしたり、荒れたまま放置しているようなことが多い。

このため、第3セクター研究会（代表 伊東弘文 九州大学教授）では、建物の残存価値を活かして、五条駅前の賑わいを再生させた太宰府市の「いきいき情報センター」の事業経緯について調べることにした。

●当初、土地活用だけの予定だったが、建物にも15年の耐用年数があることが分かり、再利用を決定。

一昨年の3月、アジアス九州（北部九州学術研究都市構想）の筑紫地区のシンポジウムで、同施設の大会議室を使わせていただいたが、土曜日だったせいか子どもから大人までがサークルや催しごとで出入りが多かったという印象が強い。

9月22日（金）、「いきいき情報センター」の会議室に出席者が集まって、太宰府市都市計画課の今村巧児さんに説明をお願いした。説明に基づいて概略を整理すると以下ようになる。

【経緯】

昭和55年 ジャスコ太宰府店開店
平成3年5月 土地・建物を保有していた会社が倒産
平成7年春 ジャスコ太宰府店が閉店すると噂が市民の間に広がる。
平成7年7月 区長会から市へ用地建物の購入要望書
平成7年8月 ジャスコ太宰府店閉店
平成7年12月 購入を前提とした「利用計画書」調査費
平成8年2月 「利用計画書」完成。
平成8年3月 議会で購入が議決。
平成8年10月 競売で太宰府市が土地、建物を落札
平成9年1月 阪神大震災の教訓で耐震構造に変更
平成9年12月 太宰府市の大店審三条申請に結審
平成10年7月 いきいき情報センターオープン
平成10年8月 スーパーパインバリュー開店

【いきさつ】

- ・ジャスコ太宰府店は、福岡市内の不動産会社が所有する土地、建物を賃借し昭和55年に開店し以後10数年間営業を行ってきたが、不動産会社がバブル崩壊の影響で倒産。福岡地方裁判所に差し押さえられた。ジャスコはテナント契約の解除とあわせて撤退した。
- ・地元、五条商店街では閉店前から噂が広がっており、土地・建物の公有化を要望する動きがみられた。とくに公共施設＋生鮮系のスーパーの立地を求める声が強くみられた。
- ・閉店後、土地だけの有効活用が考えられたが、購入を前提に市が進めた「利用計画書」では建物が15年の耐用年数をもつことが判明し、取り崩しは2～3億円の追加費用がかかる試算もあり、崩して建て替えるよりもすぐに活用しようということになった。
- ・裁判所の管理下で2年間、物件はそのまま置かれたが、その間、近所の中高生などがガラスを割って進

入、溜まり場になり、店舗内はスプレーの落書きが一面にあった。また、屋上駐車場も誰かが無断駐車するといった状態で、まさに“廃屋”の状態であった。

- ・平成8年10月、競売で市が落札（敷地8.1千㎡、建物9.4千㎡）。落札価格は13億円（ちなみに五条駅周辺は坪100万円ほど場所である）。
- ・土地建物は市の行政財産とし、13億円は公共用地先行取得事業債と地総債を活用している。

【どういう機能を入れたか】

- ・購入について議会承認を得る際、①保健センターの設置、②文化振興条例による拠点機能の設置、③五条商店街の賑わいを回復する振興策であること、などを訴えた。
- ・市では保健センター、市の電算室分室などの施設整備を検討していた段階であり、駅前の利便性の高さを考慮してジャスコ跡に入れることとした。また、文化振興条例で市民の生涯学習や自由に使える活動スペースの整備を進めるため、（財）太宰府市文化スポーツ振興財団の拠点施設として“いきいき情報センター”の設置を進めた。
- ・1階部分の商業施設のテナント交渉は、当初、商業コンサルタントのマーケティング調査を実施するという話もあったが、とにかく早く再生させる必要があるということでテナント料の最低条件を公表し、入れる業者を公募した。寿屋（近所に立地）とジャスコ以外はほとんどのスーパーが名乗りを挙げた。
- ・㈱三井松島産業（パインバリュー）がテナント業者として決定した。長崎の炭住購買部がルーツであった同社のスーパーマーケット部において市街地に立地する最初のケースといわれた。
- ・㈱三井松島産業との契約にあたっては、①施設耐用年数の15年間は撤退しない、②設備工事はバリューの負担、③テナントスペースを確保する場合は地元業者を入れる、などの点を盛り込んだ。
- ・商業施設としては第一種大型小売店舗法の申請を行うため、施設設置者：太宰府市、小売業者：パインバリューで大店法三条申請を行い、6ヶ月で結審（平成9年12月）。大店審の申請を自治体で行うケースはめずらしかった。承認を得るため半径2キロ以内にある商店街に説明し、承認を得ることにした。
- ・テナント料は近傍店舗のテナント料をもとに常識的と思われる価格を設定し、ワンフロア2,459㎡を丸々で貸し出した（グロス面積、約5千円／坪・月、年50百万円）。

【施設全体の管理コスト等】

- ・当初は内装を変えるだけということで3億円を計上したが、荒れた外構の補修や耐震構造工事、空調や電源等の工事、商業ビルを文化活動の拠点へと使えるようにする設備工事などで結局13億円必要になった。土地建物の取得費と合わせると26億円の投資である。
- ・施設は行政財産であるため、文化振興ゾーンと保健センター部分については（財）太宰府市文化スポーツ振興財団に施設管理運営委託費（2階と1階の保健センター部分）と高熱水費に年3億円かかっている。

●閉店前よりも人が多い施設に。

今村さんの案内で施設全体を見学した。今村さんは企画課に所属していた平成9年頃にこのプロジェクトを担当されており、大店法の申請において九州通産局に何度も通い、地元説明も行ったという。

この日はちょうど大雨が降った後の夕方であったため人は少な目であったが、小規模会議室や研修室の予約状況からみれば、市民サークルや料理教室などの利

用が準備が進められており、夕方から夜にかけての利用が予定されている。駅前の立地ということで、休日には会議室などの利用が多い。平成11年度の利用状況では年間19万人（会議室等の有料スペース利用者。時間単位で部屋の利用予約する「時間の自動販売機」もある）となっており、無料の情報ギャラリー等に立ち寄る人を含めるとさらに多くの人が集まる。

見ていると2階で文化活動を済ませた人がエスカレーターで降りて、買い物して帰っていく姿もみられた。なんだか先の閉店前の頃よりも買い物客は多いようにみえる。

初期投資26億円、ランニングコストの年3億円に対する収入5千万円については様々な意見があるというが、この建物の周囲に立地する20軒ほどの飲食・小売店の死活問題をかなりの程度好転させており、施設自体が市民の様々な文化活動呼び込んでいることからみれば、駅前地区のまちの賑わいに対する効果は十分にあったとみてよいように思われた。

（おぎまさとし）

跡継ぎ問題としての

長男・長女社会は始まったばかり

—地域づくりのための一知半解辞典—

伊藤 聡

少子化の問題は最近よく取り上げられるが、その一面として長男・長女社会になるという話がある。長男・長女社会は跡継ぎ問題に関係する。社会的にみれば、男女は関係なく第2子までは将来夫婦として直系の跡継ぎになる可能性が高い。第3子以降がいる世帯は誰かが跡継ぎから外れる。土地や家や家業などを引き継がない、ある意味で縛られない人が第3子以降であると考えられる。別に跡継ぎは長男・長女でなくてもいいが、表現がややこしくなるので、第2子までを跡継ぎに必要な子とする。少子化で長男・長女が増え、今後長男・長女社会化は益々進んでいくのではないかと私は思っていた。

●第3子以降の割合はここ30年間15～20%

ところが、出生順位別の出生データ（生まれた子が何番目であるか）をみると、第3子以降の出生割合は、福岡県で昭和40年以降15～20%とそんなに変わっていない。最近やや下がり気味ではあるが、昭和40～50

年頃と同レベルである。

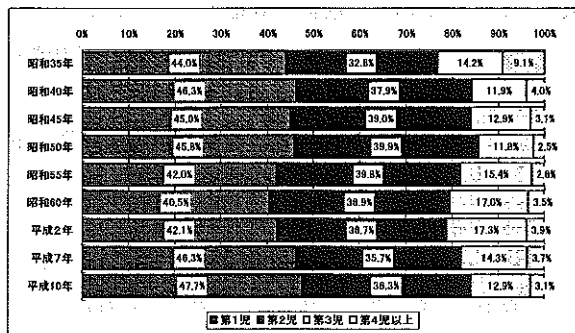
昭和50年～平成2年にかけて第3子以降の割合が上昇しているが、ここは実数でみると第2次ベビーブーム後の出生数の減少期にあたる。団塊の世代が第3子以降を生むときに、団塊以降の減少した世代が第1子、第2子を生んでいた時期という感じだろうか。

平成2年から平成10年までは出生数は安定してきたが第1子の割合が上昇している。ひとつの理由としては第2次ベビーブーム世代が子どもを生み始めたことがあると思われる。そうすると、数年後にはまた第3子以降の割合が上昇するという傾向があらわれるかも知れない。

●8割以上の子が跡継ぎ問題を考える時代

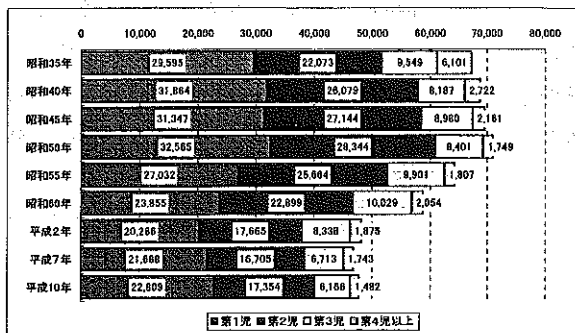
跡継ぎという意味でみると、現在と同程度の出生順位構成になった昭和40年生まれば今35歳であり、親の世代は高齢者に達する頃である。この年代は跡継ぎ問題の時期を迎えていると思われる。ここで感じるのは、よく言われる「跡継ぎがいけない問題」ではなく、「跡継ぎしなければならない問題」である。跡継ぎしなければならない問題から解放されているのは、つまり第3子以降、15～20%の人たちである。ただし、現代の若者にどの程度跡継ぎ意識があるのか、という点については不明であるが。

出生順位別出生割合（福岡県）



資料：福岡県保健統計年報（平成10年）

出生順位別出生数（福岡県）



資料：福岡県保健統計年報（平成10年）

私がこの出生順位別のデータを見たとき、最初に思ったのは「出生順位の割合はここ30年ほとんど一緒で、長男・長女社会は別に進んでないじゃないか」ということだった。しかし跡継ぎ問題から考えると、8割以上の子が跡継ぎのことを考える時期にようやく入ったところであり、この傾向は30年以上続きそうなのである。

社会や集落からみると、子どものいない世帯や名義は引き継ぐが誰もいない家などの問題が発生するが、ここでは子の側からの問題点を考えてみた。

変な憶測ではあるが、失うものはない、という意識で仕事を含めいろんな事にのぞめる人が少なくなるのではないか、守りに入る人の割合が多くなるのではないか、というような心配を少ししている。かく言う私は長男だが、

（いとう さとし）

公園づくりワークショップ③

イギリスの子どもたちと竹のアーチづくり

伊藤 聡

住民・企業・行政のパートナーシップで地域づくりを進めるグラウンドワーク（以下GW）の活動は、イギリスが発祥の地であり、GW福岡もここ数年イギリス、特に旧産炭地域でもあるウェールズ地方のグラウンドワークトラストとの交流を進めている。今年は9月にウェールズの子どもたち9人とその保護者、トラストのスタッフ、環境デザイナー、学校の先生など総勢24人が福岡を訪れた。

●小学校が年間行事以外ではじめてまとまった

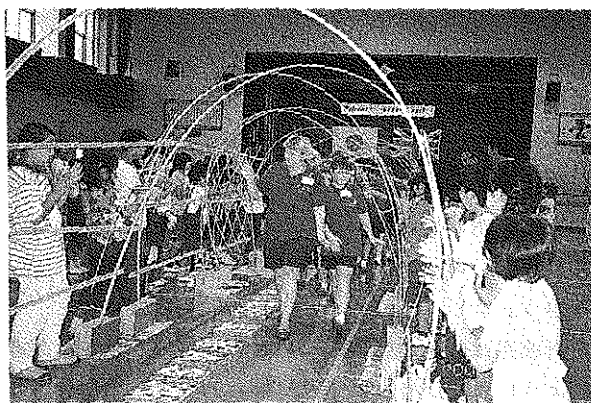
その中の行程のひとつとして、福岡県宮田町の笠松小学校で進めていた公園づくりのワークショップと一緒に作業した。今年の春までに「鳥」「魚」「昔話」「炭鉱」の4つのテーマで公園のイメージづくりをしてきた（よかネットNo44、45に掲載）。その公園の入口に竹で出来たアーチを作ろう、というのが今回の目標であった。竹のアーチのアイデア自体は、福岡のデザイナーの提案によるものだが、そこから先は小学校の先生たちで進めていった。当日は時間が限られているので仕上げ作業のみとし、そのため事前に小学校の方で総合学習の一環として、竹を切ったり、土台となるブロックをデザインしたりと準備に取り掛かった。

笠松小のある先生によれば、小学校が年間行事以外のことによって学校を挙げて取り組むのはかなり珍しいことだそうだ。これまでも笠松小はGWの活動に多く関わってきたが、あくまでも学校活動を離れ、先生も子どもも時間外に個人的に参加しているという位置づけだったのである。

●竹のアーチをデザインし、組み立てる

竹のアーチは組立式でデザインされているのだが、天気が悪かったため体育館での作業となった。アーチ状にする竹は約4mの長さで、両端から50cm間隔で3本ずつ約2mの横材を渡してつなげてある。その横材の間を子どもたちで竹材を使ってデザインし、できたら竹をアーチ状に曲げる。両端はコンクリートブロックの穴に差し込み、立ち上がる、という仕組みだ。これをグループに分けて7つ作り、つなげて一連のアーチとする。

竹のアーチはウェールズと4～6年生の子どもたち、



竹で作ったアーチをくぐる

土台のブロックに石を貼ったり色を塗ったりするのは1~3年生、それにモザイクタイルの作成をイギリスGWのスタッフやウェールズの保護者、笠松小の保護者が行った。

作業に先立って行われた歓迎会（お互いの学校紹介やプレゼント交換）が長引いて、作業時間は十分ではなかったが、時間切れのところで組立てとなった。竹がアーチ状に曲がるのか、ブロックは竹の反動で飛ばされるのではないか、など心配したが、きれいな形と

はいかないまでも、ひとつの長いアーチ（トンネル）できあがった。モザイクタイルには「DREA WALES & KASAMATSU」と書かれた。

竹のアーチは耐久性という面で大丈夫かな、と感じもするので、公園に常設とは行かないと思うが、ベントなど何かあったときには使えるのではないだろうか。

●炭坑節で盛り上がった

夜は、会場を変えて歓迎レセプションが行われ、ここで昨年イギリスへ行った現在の宮田西中2年生がGWのスタッフや子どもたちと再会した。昨年作業を手付けたボタ山での馬の造形の完成写真も見せてもらった。そして「ジャパニーズ・コールマン（炭坑夫）・ダンス」などと説明しながら炭坑節を教え、みんなで踊った。イギリスの大人も大いに盛り上がり、帰り際には「炭坑節のテープはないのか」と聞いていた。向こうも旧炭地域だから、何となく分かるのだろう。

一行は、田川、福岡、八女など約一週間福岡県内の各地で活動に参加するなど交流を深め、帰っていった。（いとう さとし）

表紙の解説

都心周辺部に高齢者が移動している

伊藤 聡

高齢者は全体的には定住意向が高く、また定住する割合が高いのだが、それでも福岡県で年間約1万2千人、65歳以上人口の約1.6%が市区町村外へ移動している。5年間では約8%（約6万人）が移動していることになる。市区町村内の移動が加わればさらに多くなるはずである。

では、高齢者はどこに移動しているのか。県内の10広域圏ごとに65歳以上高齢者の転入・転出超過（平成8~11年）をみたものが表紙の図である。福岡県全体では1,660人の転入となっているが、大きく転入超過となっているのは福岡都市広域圏で3,230人のプラス、逆に大きく転出超過となっているのは北九州都市広域圏で904人のマイナスである。この両都市圏に含まれる2つの政令市の増減をあわせてみると、福岡市の転入超過は655人であり、福岡都市広域圏の増加は福岡市を除

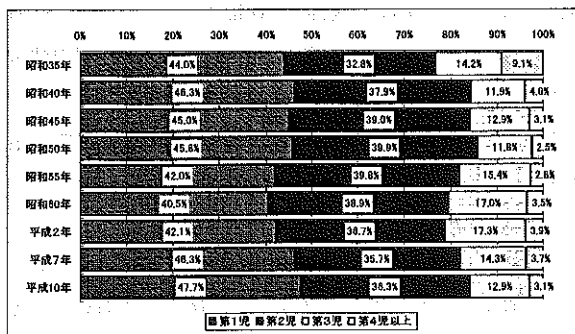
く周辺部でほとんどを占めていることが分かる。一方の北九州都市広域圏は北九州市の転出超過が1,000人と大きく、北九州市周辺は減っていない。

この両政令市をさらに詳しくみると、北九州市では密集地の多い小倉北区、八幡東区が大きく転出超過、戸建て住宅地の多い小倉南区が転入超過である。八幡東区は新日鉄関連の社宅が多い地域でもあり、また斜に住宅地が多い。

福岡市では、中心部である中央区、博多区、その区に接する南区で転出超過、西区、早良区、東区は郊外部に行くほど転入超過となっている。

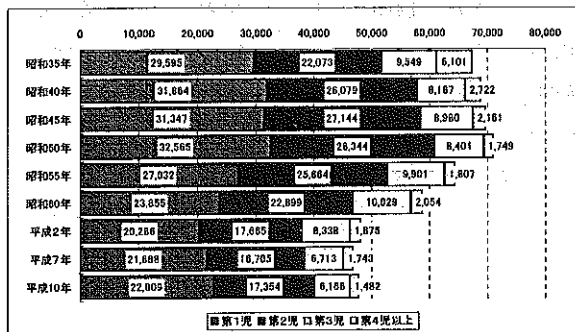
いわゆるドーナツ化現象と同じことが高齢者にこっている。これは高齢者人口全体の移動データより同居も含んでいるが、高齢者のみの世帯でみると違った動きを示すかも知れない。高齢者が増えるのは、主にここ20~30年で戸建て住宅が増加域である。都心部では古い木賃や公営住宅の建による転出がある一方で、都心周辺部で戸建て取得している子ども世帯が親を呼び寄せていると考えられる。（いとう

出生順位別出生割合（福岡県）



資料：福岡県保健統計年報（平成10年）

出生順位別出生数（福岡県）



資料：福岡県保健統計年報（平成10年）

私がこの出生順位別のデータを見たとき、最初に思ったのは「出生順位の割合はここ30年ほとんど一緒で、長男・長女社会は別に進んでないじゃないか」ということだった。しかし跡継ぎ問題から考えると、8割以上の子が跡継ぎのことを考える時期にようやく入ったところであり、この傾向は30年以上続きそうなのである。

社会や集落からみると、子どものいない世帯や名義は引き継ぐが誰もいない家などの問題が発生するが、ここでは子の側からの問題点を考えてみた。

変な憶測ではあるが、失うものはない、という意識で仕事を含めいろんな事にのぞめる人が少なくなるのではないかと、守りに入る人の割合が多くなるのではないかと、というような心配を少ししている。かく言う私は長男だが、（いとう さとし）

公園づくりワークショップ③

イギリスの子どもたちと竹のアーチづくり

伊藤 聡

住民・企業・行政のパートナーシップで地域づくりを進めるグラウンドワーク（以下GW）の活動は、イギリスが発祥の地であり、GW福岡もここ数年イギリス、特に旧産炭地域でもあるウェールズ地方のグラウンドワークトラストとの交流を進めている。今年は9月にウェールズの子どもたち9人とその保護者、トラストのスタッフ、環境デザイナー、学校の先生など総勢24人が福岡を訪問した。

●小学校が年間行事以外ではじめてまとまった

その中の行程のひとつとして、福岡県宮田町の笠松小学校で進めていた公園づくりのワークショップと一緒に作業した。今年の春までに「鳥」「魚」「昔話」「炭鉱」の4つのテーマで公園のイメージづくりをしてきた（よかネットNo44、45に掲載）。その公園の入口に竹で出来たアーチを作ろう、というのが今回の目標であった。竹のアーチのアイデア自体は、福岡のデザイナーの提案によるものだが、そこから先は小学校の先生たちで進めていった。当日は時間が限られているので仕上げ作業のみとし、そのため事前に小学校の方で総合学習の一環として、竹を切ったり、土台となるブロックをデザインしたりと準備に取り掛かった。

笠松小のある先生によれば、小学校が年間行事以外に学校を挙げて取り組むのはかなり珍しいことだそうだ。これまでも笠松小はGWの活動に多く関わってきたが、あくまでも学校活動を離れ、先生も子どもも時間外に個人的に参加しているという位置づけだったのである。

●竹のアーチをデザインし、組み立てる

竹のアーチは組立式でデザインされているのだが、天気が悪かったため体育館での作業となった。アーチ状にする竹は約4mの長さで、両端から50cm間隔で3本ずつ約2mの横材を渡してつなげてある。その横材の間を子どもたちで竹材を使ってデザインし、できたら竹をアーチ状に曲げる。両端はコンクリートブロックの穴に差し込み、立ち上がる、という仕組みだ。これをグループに分けて7つ作り、つなげて一連のアーチとする。

竹のアーチはウェールズと4～6年生の子どもたち、



竹で作ったアーチをくぐる

土台のブロックに石を貼ったり色を塗ったりするのは1～3年生、それにモザイクタイルの作成をイギリスGWのスタッフやウェールズの保護者、笠松小の保護者が行った。

作業に先立って行われた歓迎会（お互いの学校紹介やプレゼント交換）が長引いて、作業時間は十分ではなかったが、時間切れのところで組立てとなった。竹がアーチ状に曲がるのか、ブロックは竹の反動で飛ばされるのではないか、など心配したが、きれいな形と

はいかないまでも、ひとつの長いアーチ（トンネル）ができあがった。モザイクタイルには「DREAM WALES & KASAMATSU」と書かれた。

竹のアーチは耐久性という面で大丈夫かな、という感じもするので、公園に常設とは行かないと思うが、イベントなど何かあったときには使えるのではないだろうか。

●炭坑節で盛り上がった

夜は、会場を変えて歓迎レセプションが行われ、そこで昨年イギリスへ行った現在の宮田西中2年生がGWのスタッフや子どもたちと再会した。昨年作業を手伝ったボタ山での馬の造形の完成写真も見せてもらった。そして「ジャパニーズ・コールマン（炭坑夫）・ダンス」などと説明しながら炭坑節を教え、みんなで踊った。イギリスの大人も大いに盛り上がり、帰り際には「炭坑節のテーブルはないのか」と聞いていた。向こうも旧産炭地域だから、何となく分かるのだろう。

一行は、田川、福岡、八女など約一週間福岡県内の各地で活動に参加するなど交流を深め、帰っていった。

（いとう さとし）

表紙の解説

都心周辺部に高齢者が移動している

伊藤 聡

高齢者は全体的には定住意向が高く、また定住する割合が高いのだが、それでも福岡県で年間約1万2千人、65歳以上人口の約1.6%が市区町村外へ移動している。5年間では約8%（約6万人）が移動していることになる。市区町村内の移動が加わればさらに多くなるはずである。

では、高齢者はどこに移動しているのか。県内の10広域圏ごとに65歳以上高齢者の転入・転出超過（平成8～11年）をみたものが表紙の図である。福岡県全体では1,660人の転入となっているが、大きく転入超過となっているのは福岡都市広域圏で3,230人のプラス、逆に大きく転出超過となっているのは北九州都市広域圏で904人のマイナスである。この両都市圏に含まれる2つの政令市の増減をあわせてみると、福岡市の転入超過は655人であり、福岡都市広域圏の増加は福岡市を除

く周辺部でほとんどを占めていることが分かる。一方の北九州都市広域圏は北九州市の転出超過が1,000人と大きく、北九州市周辺は減っていない。

この両政令市をさらに詳しくみると、北九州市では密集地の多い小倉北区、八幡東区が大きく転出超過、戸建て住宅地の多い小倉南区が転入超過である。八幡東区は新日鉄関連の社宅が多い地域でもあり、また斜面住宅地が多い。

福岡市では、中心部である中央区、博多区、その両区に接する南区で転出超過、西区、早良区、東区など郊外部に行くほど転入超過となっている。

いわゆるドーナツ化現象と同じことが高齢者にも起こっている。これは高齢者人口全体の移動データであり同居も含んでいるが、高齢者のみの世帯でみると、また違った動きを示すかも知れない。高齢者が増えているのは、主にここ20～30年で戸建て住宅が増加した地域である。都心部では古い木賃や公営住宅の建替などによる転出がある一方で、都心周辺部で戸建て持家を取得している子ども世帯が親を呼び寄せていることが考えられる。

（いとう さとし）

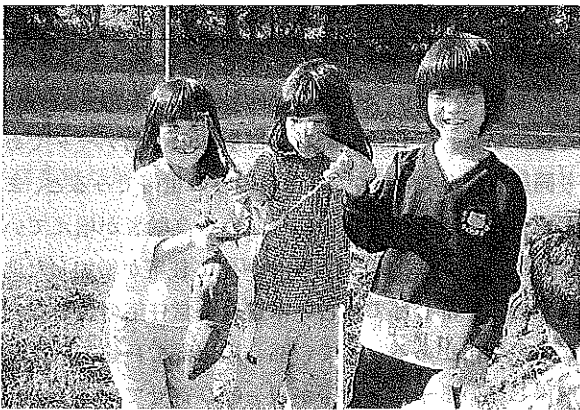
所員近況

●黒豆の味噌と辛子明太子

去年、丹波黒という黒豆の枝豆を食べたくて作った。ところが、枝豆はまことに美味ではあったが、雨続きで収穫が遅れ大半が黒大豆になってしまった。それでこの春、黒豆味噌を作った。もちろん、母親に教えられた作り方を守ったので、「塩分ひかえめ」ではない。塩分ひかえめの味噌は味が変わってしまうが、わが黒豆味噌は安定している。先日、明太子を買うときに、十分気をつけなかったので塩分ひかえめを買わされた。これはすぐ味が変わってしまった。もともと「塩分が多いと体に悪い」という話は、順序が逆ではないかと思う。それなら味噌の量を加減すればいいのである。薄味の味噌を使った味噌汁は、もっさりとした甘さのみで、しゃきっとした切れ味がないと思う。黒豆の味噌を仕込むに当たって、天神のデパートや、京都の錦市場の黒豆の味噌を買って勉強してみた。値段は高かったが、これもブルータス（「お前もか」といった義侠がある）であった。一度、わが黒豆味噌をご賞味していただきたいものである。「それほどでもないな」ということになるかもしれないが、「はじめてにしては」ということもありうる。

○十月の新タケノコ・四方竹

十月はじめに、浮羽町の国武さんのところに泊めてもらって、四方竹というものを食べさせていただいた。「十月にタケノコが出るのですか」と言いながら、しゃきっとした歯触りを楽しんだ。その他に、里芋、コンニャク、大根などの素材の味を引き出すような味つけで、おいしくいただいた。こういう自然の味を引き出すのは、旅館などより遙かに上手である。



サツマイモは、こんなに大物が穫れました。

○蕎麦の花見会など

わが畑に、2反歩ほど蕎麦を蒔いた。本来蕎麦は乾燥地の作物なので、雨が降ったら水がたまるような畑には不向きなのだが、借りている畑なので贅沢は言えない。とにかく水はけの悪いところも、芽を出して花をつけた。水はけのいいところは元気にのびて、かなり穫れそうである。十一月はじめでもまだ花が残っている思う。

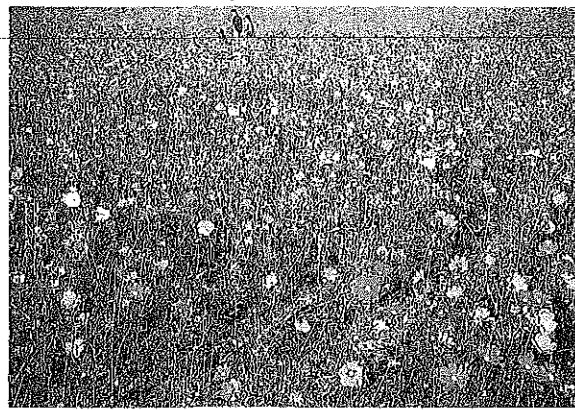
丹波黒は、今年は暖かだったので実のつきかたが遅いように思う。枝豆は十一月はじめが食べ頃かな。サツマイモも好天に恵まれて大豊作です。イモ掘りにどうぞ。（糸乗 貞喜）

●私と母をつなぐ花

春の訪れを桜で知ると同じように、秋の訪れが近いことを私はコスモスで知る。コスモスは私にとってまさに「秋桜（秋の桜）」なのである。

福岡県内には、能古島や遠賀川沿いなどコスモスがたくさん咲いているところはいくつかある。その中の1つである海の中道海浜公園で開かれていた「コスモスマつり」に10月9日に行ってきた。ちょうど最終日だったこともあってか、花びらが散り始めていたり、根元から倒れてしまっていたりしているものもあった。しかし、広々とした敷地に咲き乱れている約20万本のコスモスに圧倒されて言葉もでなかった。その日は散歩をするにはいい天気で、多くの家族連れやカップルが訪れていた。私もその中に混じって、大好きな花に囲まれて約1時間の散歩を楽しんだ。

私がこれほどまでにコスモスを好きになったのは、2年前に亡くなった母の影響が大きい。コスモスは母が大好きな花で、秋になるとコスモスを見ながらとてもうれしそうにしていたのをよく覚えている。母の誕生



あたり一面に広がるコスモスの花

日には毎年、コスモスが描かれたカードを送っていて、母＝コスモスというイメージが自分の中にできあがっていた。だからかもしれないがコスモスを見ると、母に怒られたときの言葉だったり、一緒に出かけた場所だったり母との思い出を思い出すことが多い。今になってみると、母と同じものを好きでいられるというのはとてもうれしいものだ。コスモスはこれから先もずっと、私と母をつないでくれるもの1つに違いない。

(梶原 里香)

釣りに上げたものを食す……はずだった。

いけすで自分が釣った魚を料理してくれる居酒屋があるという話を聞き、そんな楽しそうな所には行ってみるべし、というわけで情報源の友達と、福岡市南区野間にある「さうお」に行ってきました。

行く前にどうしても疑問に思うことがありました。

1. 「あじが食いたい(予算的にも)」と思っている人が鯛を釣ってしまった場合、返品交換できるのか?
2. いれぐいで釣れてしまった場合は、持ち帰りできるのか?

1つ目の疑問はすぐに解決しました。いけすには、鯛、あじなど、数種類泳いでいて、返品交換はできないけど、値段は全て2,000円以下なので安心です。

飲み物だけ注文すると、早速釣りを始めました。いけすには100匹以上泳いでいるので簡単に釣れると思っていました。しかし、魚たちは餌に見向きもしません。聞くと餌をあげているというのです。簡単には釣れないと思い、とりあえず刺身以外の料理を注文し、食べながら釣ることにしました。気が付くと2時間も経っていました。2つ目の疑問も解決しました。いれぐいは無理です。(本当は持ち帰りできます) いつまで経っても釣れない私達を不憫に思ったのか、店員の方が違う餌(普通は小エビ)を持ってきてくれました。その餌とは、サーモンと鯛とドッグフードみたいな物でした。「これを食べるのか?」と少し不安でしたが、試してみました。が、釣れません。他のお客さんからは、「浮きを、もう少し下にしたら」とか「あの弱ってるやつなら釣れるかも(そんなのは食べたくない)」などアドバイスを頂きましたが、結局1匹も釣れず、最後は普通に刺盛りを注文しました。

結果は0匹でしたが、楽しかったので、また行こうと思います。今度は4～5人で。(佐伯 明日香)

いつでも仲間が身近に感じられる道具

前出のヤングネットワーク九州に関連することだが、中国・韓国で一緒に行動したグループ(九州・沖縄8県、各県約2人で構成されている)でメーリングリスト(以下ML)というものをつくっている。

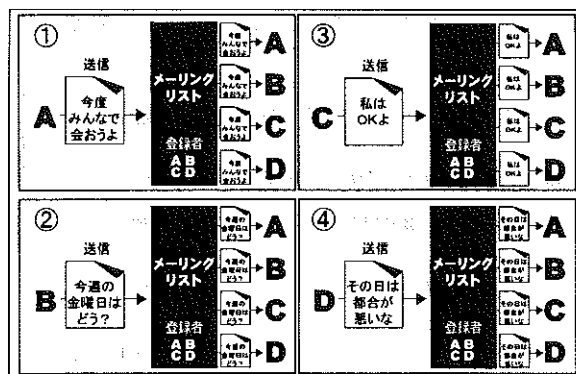
ご存じの方もいらっしゃると思うが、ここで、MLの説明をさせていただく。あるメーリングリスト用のアドレスにメールを送ると、そのメーリングリストに登録されたメンバー全員に配信されるものである。

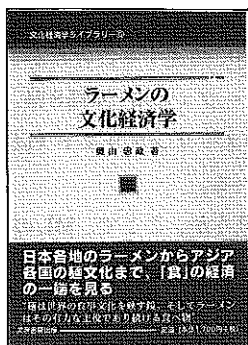
顔は見えないけれど、みんなが集まって会話しているような気分になれるものである。最近では携帯電話でメールの送受信をする人が多いが、このグループでも携帯でのアドレス登録が多く、その場合はリアルタイムにメールによる会話ができる。中国・韓国研修後もMLでみんなと会話して、研修の思い出に浸っている人が多かったように思う。

10月初旬の連休にグループのメンバーで湯布院に集まろうということになった。しかし、MLによっていつもみんなが会話しているため、「久しぶり」という感じがしない人もなかにはいた。パソコンでテレビ電話らしきものも登場しており、パソコン上で顔を会わせるのも時間の問題だろう。

(小田 好一)

メーリングリストの使用例





ラーメンの文化経済学

奥山 忠政 著

芙蓉書房出版

まず、文化経済学とは何かを本書の文章を引用させていただくと『「文化」は「市場」を中心概念とする従来の経済学で捉えることができない。これを新たな次元で捉え直そうとする学問』とある。その文化経済学にとって「ラーメン」は重要なテーマである、という結論に至るまで、分かりやすく説明されているのが本書である。

中でも、私が興味をひいたのは「世界の即席麺総需要量推移」「ラーメン価格の推移」「地域別ラーメン平均価格」「ラーメン店の経営数値」などのラーメンデータである。即席麺総需要量について少し紹介すると日本では1997年に年間53.2億食、単純に計算すると国民全員が週に1度は即席ラーメンを食べている計算になる。また、地域別ラーメン価格では、最もラーメンが安いのが東大阪市の377円、一方最も高いのは立川市

第3セクター研究会の例会のお知らせ

第6回例会『庶民が楽しむ競技サポート型のサービス産業へ～上津江村オートポリス再生の歩み』

日時：平成12年11月18日(土)14～16時(予定)

第3セクター研究会の活動は2年目を迎えます。第6回例会では大分県上津江村の「オートポリス」を取り上げたいと思います。これは、もともと村にF1レースを誘致しようとした施設ですが、紆余曲折を経て、今では管理専門の3セクが庶民が楽しめるイベントをサポートする会社として施設利用を増やしています。高級品一発型から大衆サービス型へ。今回はそうした再生にいたるプロセスについて勉強したいと考えています。興味のある方は、事務局の尾崎までご一報を。

で700円、札幌市がそれに次いで695円である。九州だけで見ると最も安いのは北九州市で438円、最も高いのは鹿児島島の630円であった。データ以外にも全国の珍ラーメンや世界の麺などの紹介もあり、これ一冊であなたもラーメン博士だ。(小田 好一)

編集後記

■農村の後継ぎ、空き家の後継ぎなどいろんな後継ぎ問題がありますが、言葉の受け継ぎのお話を少し。以前、地域ゼミでお話していただいた西表宏先生のお誘いで「ゆんたくの会」という沖縄の言葉遊びの会に出席しています。戦前戦後の混乱期、青年時代に沖縄を離れ、今は福岡に落ち着いて過ごしておられる諸先輩方(70代くらいかなあ)と一緒に、「戦前の沖縄ことば、今の沖縄ことば、今の日本語」を照らして、琉歌の詠み合わせ、料理、風俗、芸能、文芸、恋愛など、様々なテーマに沿って、半世紀の前の断片的な想い出話を掘り起こしてワイワイ討論する勉強会です。そうした知的好奇心でワイワイ話をするのが、年齢や世代を結ぶことにつながるのだと感じています。(ざ)

■地域が一体となって応援することの多い地方都市のプロ野球チームほど、優勝間近になると「えせファン」が多くなるのではないだろうか。私はその一人である。普段、プロ野球にはほとんど興味がないのだが、今年も優勝間近になってからダイエーが気になる。これが出る頃には白黒ついているが…。(お)

よかネット NO.48 2000.11

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

http://www.yokanet.com

Mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

東京事務所

TEL 03-3226-9130